そこで母親が色々と賺し拵へて、其の不吉な土器を捨てさせようとしたけれども、すればする程、おいよは益々其の土器の誘惑を感じて、捨てるどころか絶えず肌身につけて、時折味ひ樂しんでゐました。

噂は忽ちひろまつて近郷の大評判になりました。

態々遠くから其の土器を味ひに來る物好もありましたが、誰の舌にも其の蠱惑的な味は感じなかつたのでありました。

或る日、おいよは近所の人に誘はれて、母親と共に長岡の千手觀音に參詣することになりました。

髪を結ひ、着物を着換へたおいよはまるで見違ひる程美しくなつて一行に加はり、高く雲雀が啼いて、青い麥の穗波に陽炎の立つ中を燒田の渡し場に來て、乘合船に乘つたのであります。

空は青々と晴れ渡つて、遠山は紗のやうに霞み、近く菜の花は黄金色に畑に咲いて、

野には菫や蒲公英が一面に咲き亂れ、衣香傘影が彼方此方に續いて、如何にも春らしく、歡樂をそゝるやうな長閑な日でありました。

おいよ一行を交へて色々の人々が無邪氣な心に若返つた罪のない賑かな話を乘せた船が恰度信濃川の中程に浮み出た時でありました。

嗟憎、船の眞上に當つてぽつちりと異形の黒雲が現はれました。虫が知らすか、晴着に着飾つて浮れ心地になつてゐた人々は、切角の今日の幸福をあの雲のために臺無しにされるやうな氣がして、急に不愉快な顏を曇らせました。すると其の雲は見る間に擴つて、空は意地惡くも段々灰色になり、墨色になり、川面は風立つて、果は大粒の雨が横さまに顏を打つて來ました。

人々は此の大荒れにすつかり華かな希望を打ちこはされたので、業が煮えて泣きたいやうでありました。

船頭は俄かの天變に色を失ひ、急に櫓を早めたのでありましたが、船は少しも思ふ方へは進まないで、常に激流の渦巻く淵の方へばかり吹き流されさうになつて、幾度

舳先を立て直しても唯くるくる廻るばかりでありましたが、到頭、しまひに淵の上に突き進んでしまひました。するとさながら淺瀨にても乘り上げたやうに船はぴつたりと止つて、まるで釘付にでもされたやうに金輪際動かうともしませんでした。

死に者狂ひになつた船頭が懸命の努力もすべて無効でありました。百方力盡きた船頭は唯渦巻き泡立つ水面を呆然として見てゐる外に手の下しやうがなかつたのであります。

雨は段々大降りになつて、川面に時ならぬ無數の霰を躍らせました。

その時であります。誰云ふとなく、

「これは屹度龍神の仕業に違ひない。それだから各自身についた物を一つ宛川の中に投げ込んで見ようではありませんか。何か變つた徵候があるに相違ありません。其の人は身を犧牲にして龍神に捧げることに致しませう」と、云ひました。

顏見合せた同舟の人々は危懼の念に驅られて躊躇ひながらも、之に贊成しなければなりませんでした。

此の時、おいよの母親の頭にあの不吉な土器の形が氣味惡く稻妻のやうに閃いて過ぎました。

各自は不安ながら手拭だの櫛だの簪だのを投げ込んで息をとめて見てゐると、外の品物は瞬く中に荒波に呑まれて見えなくなりましたが、おいよの手拭ばかりは不思議や逆巻く濁流の上に濡れもせず流れもしないで浮いてゐるではありませんか。これを見たおいよの母親は忽ち顏色土の如く、狂氣のやうになつて日傘で幾度も幾度も其の手拭を水中に突き込みましたが、すぐ浮き上つてしまひました。

そこで同舟の一人は、

「さて皆さん。此の手拭の主こそ龍神に嫁く人であります。多くの人の命のため、見込まれたが因果とあきらめて、お氣の毒ながら水に入つて下さい。さあ早く、早く」と、促すので、身に禍をのがれた人々はほつと安心して、異口同音に「早く、早く」と、急き立てたのであります。

身の不運に泣き崩れてゐたおいよは、力なく立ち上り、同舟の人々を怨めしげに見や

りながら、娘を舷に庇ふ母親に最後の訣れをして、山なす波の眞只中に淵然とばかり身を躍らせたのでありました。すると風雨は忽ち熄んでまた麗かな日和になり、船はもとのやうに辷り出しました。

おいよの母親は急に魂が拔けたやうになつて、物も云はれず、泛ぐやうな手つきで、幻に浮ぶおいよを時々掴むやうに、手を握つたり開いたりしてゐました。

船は漸く對岸に着きました。

人々は初めて蘇生の思をして、恐しかつた事など話し合ひながら觀世音に向ひました。

おいよの母親は一人堤の上に殘りました。

川面は日盛り一しきり上下の荷舟客舟で賑ひました。

おいよの母親は髪を亂し跣足になつて、堤を行きつ戻りつして、娘の名を連呼してゐました。

日暮が來ました。

川風がうそ寒く、夕闇が川の上に立ち罩めて、生温く雨模樣に曇つた空からは僅かな星影が燐のやうに仄いてゐました。

終日、狂ひ疲れたおいよの母親は此の時泣き顏を振り立てゝ、

「おいよやあ、これおいよ。せめて今一度顏を見せてくれ」と、叫ぶと、俄かにおいよが沈んだ淵のあたりに波立ち騷ぎ、大蛇の腹のやうに水面を照して、幻の如き焰が十丈ばかりぼうつと燃え上り、其の炎の中には世にも恐しい女龍の姿が現はれました。

母親は、

「一生の別れに、もう一度世にあつた時の顏を見せてくれ」と、泣き號ぶと、女龍の姿も焰も次第に消えましたが、暫くして再び十丈ばかりの焰が燃え上つて、その中においよは燦爛たる錦を纏ひ、玉の冠を戴いて、花も恥らふ麗しの殿御と互に手を握り合うて立つてゐました。

「喃、母者人、妾は既に此の世の者ならず、生れぬ先に誓ひてし蛇界の王に嫁入りする約束の日も定まりぬ。さらば往かん。正きく世を過しませ。懷しの母者人。戀しの

母者人。……」と、云ひながら、おいよは次第に其の影淡く、守門ケ嶽の峽谷に當つて消えたのでありました。

おいよが母親は其の後どんな世涯を送つたか、世に傳はつて居りません。

此の哀れな話を殘した川筋は、其の後幾變遷して、燒田の渡しは今は廣い礫原になつてゐますが、おいよが靈は後弔ふ人もなく、寂しい河原に迷うてゐることでせう。

豪力長兵衛

寛永年間のことらしい。

中頸城郡の或る村に長兵衛といふ若者があつた。生來虚弱で常人の持つだけの力量がなかつた。

或る日、長兵衛は村の若者達と共に米を一俵宛背負うて他村行にかなければならなかつた。初めの中は長兵衛も負けぬ氣を出して皆のものについて行つたが、途中から段々遅れてつひにはどうしても歩けぬやうになつた。殘念で堪らなかつた長兵衛は一休みした後、何とかして起き上りたいと焦つたがつひに其の甲斐がなかつた。長兵衛は仲間の薄情を怨み、自己の弱さを泣いて口惜しがりながら、一俵の米を寂しい野道に置きざりにして家に歸らねばならなかつた。

東頸城郡猿、また、の瀧の不動に長兵衛の姿が現はれるやうになつたのはそれから間もない頃のことであつた。彼は百日の間遠い山路を瀧の不動に日參して、豪力を授けてもらふために祈願をこめたのであつた。

其の祈りは無駄ではなかつた。

滿願の日、彼は試みに毎日ひと掛づゝ奉納して百掛になつてゐた芋を切つて見た。すると芋はいとも容易に切れて、彼はつひに驚くべき豪力を得たのであつた。

長兵衛の喜びは譬へるものもなかつた。彼は其の日から誰憚ることもなく世間を濶歩せられる己を思ふと愉快でたまらなかつた。それと同時に、授けられた其の豪力を以て、今迄世間から受けた侮を物の見事に雪ぎたいといふ慾念が猛然と彼の心に湧き起つた。彼は腕に力瘤を入れ、力足を蹈みしめ、喜び勇んで歸途につかうとした。すると、あまりの豪力に足が土中にめいりこんでとても歩かれなかつたので、彼は早速願もどしをして、敵一倍の力を授けてもらつて家に歸つて來た。

臼などは椀を持つより容易であつた。

或る晩である。彼は數里さきの鎮守の社から、長さ一丈、徑三尺位の石の華表を腰にさしたり小脇に抱いたりして來て道の眞中に横へ、夜遊びに出る村の若者共を困らして獨り喜んでゐた。

或る時はまた用水池に小山のやうな石を投げこんで、水を瀧のやうに汎濫させて面白がつてゐた。

家のまはりに長さ十五間、高さ一丈に近い土手を朝飯前に枕、で作つたこともあつた。

彼の力量は忽ち世間に知れ渡り、村人は急に彼を畏敬するやうになつた。

己の豪力に自信を得た彼は、或る年江戸に出て、時の日の下開山といはれる力士に力比べをしたいと申しこんだ。すると先方から先づ力比べをする前に其の力の程度を見たい。力比べするだけの力量のある者なら、其の上で相撲はうといつて來た。

「何を小癪な、人を小僧扱ひにしてゐる」と、怒つた彼は、只、一押して四本柱の天邊まで土中に突き込んで見せた。其の豪力に肝を冷した日の下開山は縮み上つて降參

したといふことである。

長兵衛はまた高田在の稻田で駕籠人足をしたことがあつた。普通なら二人で舁ぐ駕籠を、彼は天秤棒の片端に縛りつけて一人で幾つも舁いだ。そして稻田の橋の上などでよく其の駕籠を縛りつけた天秤棒を橋の縁から川の上に突き出して、足の爪先で蹈みながら煙草を薫すことがあるので、彼の豪力を知らぬ旅人は駕籠ながら川の上に吊されて隨分肝を潰した者も澤山あつたといふ。

或る年のことであつた。

長兵衛は同村の女共數人を伴ひ京詣りに出かけた。

途中で彼は周り七八尺もあらうかと思はれる松の大木を撓めて腰を掛け、疲れた女共もそれに掛けさせて其の足を休ませてゐた。すると一人の馬方がやつて來て荐りに馬に乘れとすゝめる。長兵衛がそれを斷ると今度は酒代をくれと强請る。五月蠅い奴だと思つてゐるうちに、そこらに隱れてゐたらしい馬方五六人一度に出て來て同樣に酒代を强請つた。

「うむ、讀めた。こいつらは毎日かうして旅人を强迫しては金銀や衣服をとる山賊の類に違あるまい、よしそれなら一つ目に物見せてくれる」と、長兵衛は女共を數間離れた草の上に休ませ、それから顏色を和げて馬方共に向ひ、

「では望み通りの酒代もやらうから隨分氣をつけて此の足弱共を次の宿まで送つてもらひたい……さあ、さうと事がきまつたら皆が此處へ來て一服するがいい、それからぽつぽつやつてもらはうか」と、馬方共を件の松の大木の腰掛に請じた。

馬方共は圖られるとは露知らず、狡猾な笑を汚い口許に浮べ、凄い無智な眼を輝かしながら松の腰掛の上に腰を下し、馬の手綱を其の腰掛に結へて莨を燻し初めた。

油斷を見澄した長兵衛がひよつと立つた。撓められてゐた松の腰掛は急にもとの直立にかへつた。それとは知らずに腰掛けてゐた馬方共は繫いであつた馬諸共一度に虛空に跳ね飛されて深い〳〵谷底に投げこまれた。

一行は無事に京詣りを果すことが出來た。

後半生に於ける長兵衛が社會的活動は實に目覺しかつた。彼は其の無雙の豪力を利用して常に常人の企及せられぬ勞役にも平氣で服して偉大なる功績を樹て、邪を討ち、惡を懲して大いに人類のために貢獻し、河童との力比べを最後として、其の光輝ある生涯の幕を閉ぢたといふことである。

黃金の神像

大同年中の事であつた。

松の山村古戸の鎮守の前を走る街道を馬に乗つて通る程のものは、誰でも必ず落馬の憂目に遭つた。いかに馬術に秀てた人でも屹度振り落されないものはなかつたのである。

古老の言によれば、それはかうである。

其の昔、此の古戸に「松守さま」といふ神様が住んでゐらせられた。此の神様は、猛く勇ましく、しかも優しい男の神様でゐらせられた。(鎮守松守神社は後に此の神様を祀つたものである)。

其の頃、附近の三桶と云ふ處にはまた「白鬚大明神さま」といふ、お心の荒い神様と、

松口といふ處にはまた「權限さま」といふ、髪の長い色白の麗しく優しい女の神樣とが住んでゐらせられた。

松守さまと權限さまとは既に夫婦約束を交されてゐたので、毎日のやうに往復せられて、睦じく遊び暮し、語り明され、朝は朝靄の中から歡喜に輝く晴々しい笑顔を並べて、互に手をとつて出て來られ、夕は夕陽が美しい夕映を大空に殘して沈むと、音もなく立ち罩める五色の靄の一つ帳の中に入らせられて、神代ながらの戀を囁き交されて、目出度い日の近づくのを、指折り數へて待つてゐらせられた。

此の樣子を見られた白鬚大明神さまは、むら〳〵と嫉妬の炎をもやされ、權限さまが往復の途中に要して、屢〻脅喝し、阿諛し、松守さまを口を極めて讒誣せられて、つとめて自らに靡かせようとせられた。

困つたことになつたと思はれた權限さまは、いつも笑顔で、柳に風と受け流して、お心の荒い白鬚大明神さまの嫉妬心を高ぶらせないやうにしてゐられた。

白鬚大明神さまは其の思はせ振りな、袞え切らぬ態度が、すこぶるお氣に入らなかつたので、いたく立腹せられて、權限さまに對して暴行の限りを盡された。其の果は身命を危くする企をさへ計畫されたので、權限さまは遂に遠く松代村の犬伏といふ高い山へお逃げなされた。

今の犬伏の權限さまは此の神樣を祀つたのである。

此の事を聞かれた松守さまはいたく失望落膽せられて、私かにお使を遣はされ、權限さまにたいして屢〻お返りを促せられた。

然し權限さまは終にお歸りにならなかつた。

白鬚大明神さまは「小氣味よし」と嘲笑はれた。

勇ましく、しかも優しかつた松守さまの戀に破れた心は次第に慘酷になつた。

其の時から松守さまと白鬚大明神さまとの間には日夜爭鬪の絶え間がなかつた。

見兼ねた里人は白鬚大明神さまを遠く大舟といふ峠の麓に強ひて移し申した。

爭鬪は絶えた。

幾年かすぎた。

世を去られた松守さまは神に祭られて、松守神社となつた。けれども慘酷になられたお氣性はもとにかへらなかつた。そして鎮守松守神社の前の街道を乘馬で通る人をば常に落しては樂しまれた。落された農夫や旅人の中には時折落命したものさへあつた。

困じ果てた里人は相談した。

鎮守の森の大欅の下に大穴が掘られた。

御神体は永久に其處に埋められた。

不思議なことには埋める時の御神体は、常にかはつて目映きばかりの黄金の神像になつてゐたといふ。

御神体を失つた松守神社には「十二神」といふ神樣を迎へて祀つた。

それから星移り物變り千餘年を經た今日も、猶ほ神祕な囁きを聞くやうな鬱蒼たる森の古欅の寒い木蔭には「松守神社」と彫りつけた石塔が建てゝあつて、其の下には昔ながらの黄金の神像が埋まつてゐると云ひ傳へられてゐる。

近年、屢〻其の神像を掘り出して見ようぢやないかと云ふ話が村人の口端に上るけれども、いつも茶話に終つて、未だに其の儘になつてゐる。

落馬といひ、黄金の神像といひ、世にも不思議な傳奇が、今も古老の間に繰り返されて、若人の好奇の心をそゝつてゐる。

折

峠

羽前の小國村をたつた瞽女のお倉は、岩船郡關谷村に向つて折峠にかゝつて來ました。

落日に近い頃でありました。

荊棘の藪に赤松などの交つた道の兩側の雜木林は赤く黃色く色づいてゐました。小鳥が今日の日に名殘を惜んで夕暮を知らせ合つてゐるやうに、物悲しく忙しさうにぴい〳〵と鳴いて、ちよん〳〵と枝から枝に飛んでゐました。寒い北風が佗しい音を立てゝ梢を渡ると、木の葉がかさ〳〵と鳥の飛ぶやうに陰つた木の間に落ちました。

お倉は寒さがぞく〳〵身に沁んで一入旅愁を覺えました。

奇妙な形をした震片（くもぎれ）の浮んでゐる空は、落日の光にまばゆく燃え盛つて、其の火の

海には黒い鳥の影が吹き散らされたやうに飛んでゐました。

幾歳の旅路の苦勞に窶れたお倉は、着物の色目もすがれ、風雨に晒された笠は茶色に色づいてゐました。

せめて此の一冬は純朴な越後の人の情に縋つて、暖い愛と惠の門に過したいと思ふと、お倉は矢も楯も堪りませんでした。

しかし、越し方の辛かつた世間にも、また涙ぐましい人の情は到る處に落ちてゐました。拾うて感謝の門を巡る幾日かゞ其の小國村で過ぎたのでありました。

併し、お倉は其の人家尠い村に、さりとて愛に甘え情に縋つてばかり日を經るのはとても忍びないやうになりました。其の上未だ老先永い身を只徒らに其の山里の雪に埋もれるのも殘念だと思ひましたので、強ひてひき留めてくれる村人の厚意を無にして、濟まぬ思ひで其の土地を立ち去つたのでありました。

「峠を越えて今宵の中に關谷村に着かれるかしら。凡その道程も聞いてゐるが、夜更けぬうちに早う家内團欒の仲間に入れて貰ひたいものだ」と、お倉は忙しく杖を振り動

かして、とつかはと足を早めたのでありました。

然るにどう踏み迷つたか、行けども行けども人里に出ることが出來なかつたのでありました。

お倉が漸く峠の上に辿り着いた頃は既に初夜過ぎてゐて、行く手の山の端には狸でも化けて出たやうな大きな月がぽつかりと浮び出てゐました。薄や尾花の穂波は銀色に光つて、木草の根方に咽ぶ蟲の聲々は、さながら月の出端を歌つてゐるやうでありました。

行き暮れたお倉は心をきめて、ふと杖に觸つた傍の辻堂に一夜を明さうと考へました。

堂と云つてもそれは名ばかりで、簷は傾き、屋根は苔蒸し、扉は缺け損じて、月の光が歪んだ格子戸から水のやうに冷く流れ込んでゐました。

お倉は背負うて來た琵琶を下し、脚絆を解いて、疲れてほてる足を投げ出して堂の壁に凭りかゝると、急に飢と寒さとを感じて來ましたので、用意の握飯を取り出して

貪るやうに食べました。さてからして腹が滿ちてくると今度は躰軀も幾分暖くなり、疲れが出てきて睡氣を誘うたので、お倉は壁に靠りかゝた儘いつの間にやらうつらうつらと夢路を辿つてゐました。

夜は深々と更けました。

月が天心に來た頃、お倉は藪蚊に手足を螫されて眼を覺しました。

たら〳〵と水の垂れさうな寒い月の光に照されて、草葉の露は眞珠のやうに光つてゐました。冷氣が頸筋や袖口から氣味わるく忍びこんで、肌が濕るやうでありました。

ころ〳〵と鳴く蟋蟀の細い悲しい調を聞くと、お倉は馴れた旅路の獨りとは云ひながら、滅入るやうな寂しさを感ぜずには居られませんでした。

ふと、思ひついたお倉は傍の琵琶を取り上げて、此の寂しさを紛らさうと膝の上に彈き初めたのでありました。

其の眉を上げて唄ふ張り切つた聲と、高く冴えた撥音とは木々に木靈して谷川の音をとめ、鳥の夢を驚かして、ここに人跡絶えた深山の夜更けに、時ならぬ音樂の世界

が現出され、萬物悉く眠り覺め恍惚として聽き入るかと思はれるばかりでありました。

ふと、お倉は何ものかを耳にしました。空耳か、あらず、落葉を踏む音が絃歌の律呂を亂したのであります。

音はそれきり歇んで敢て近寄るけはひもありません。

お倉は覺悟を定めて更に撥音高く唄つて、軈て一段を彈きをへました。

「あゝ、面白かつた」と、蓮葉な女の聲がしました。

お倉はぎくりとして、

「誰だ、そこにゐるのは」と、惡寒に躰軀が戰慄き震ふ唇から、恐怖に怯えた聲を發しました。

「喃、法師、妾はそなたを害ふものではありません。そなたのお蔭で今宵はどんなに樂しかつたことでせう。そなたの絃と唄との力に引寄せられて、知らず〳〵此處まで來たのであります」と、

針のやうに堅くすき徹る聲を聞いた時、お倉は屹度狐狸妖怪の類ひに違ひないと思

ひました。

すると、女はなほも言葉をつぎ、

「妾はもと女川村蛇食の獵夫、鱶七の女房、折でありました。

丁度、今から三年前、夫鱶七は山から何やら捕へて來て甕に漬け、閾の下に埋めて、千人の人が跨いでから食べる。それまでは昧ふところか蓋を取ることさへもならぬと堅く戒められたのでありました。しかるに日數重なるにつれて、自らも不思議な程其の甕が氣にかゝつてなりませんでした。開けるなと云はれゝば云はれる程開けて見たくて晝夜悶えました。

或る日のことでありました。

妾は遂に堪へ切れなくなつて、夫の留守を幸ひに大罪を犯すやうな氣持で、其の甕の蓋を開けました。すると何とも云ひない宜い薫がしましたので、思はず手が出て、其の肉の一片を燒いて食、べました。すると舌がとける程甘かつたので、妾は其の戯的な味に魅せられて、燒いては食ひ燒いては食ひ、瞬く間に殆んど貪り食つてしま

ひました。最後に何の肉であらうと味噌を落してよく〳〵見れば、それは蛇の肉でありました。はつと胸が惡くなつて唇拭ふ隙もなく、烈しく喉が渴いて來ました。臺所に走つて水甕の水を呑みました。渴は段々烈しくなつて、喉がいら〳〵して搔き搖りたい程でありました。遂に水甕の水をすつかり呑み盡しました。

渴は益烈しくなるばかりです。

妾は夢中になつて前の女川に走りました。そして腹這ひになつて、口を川に突き込んで、思ふ存分の水を呑みました。

其の時であります。

ひよつと水鏡に映つた妾の顏を見て、魂が消えるかと思ふ程驚きました。眼尻は裂け、口は眞紅に耳まで切れ、舌端二つに割れて、緣の黑髮はうよ〳〵と無數の蛇の泅ぐやうではありませんか。

あつと目が眩んだ刹那、妾は川の中に辷り落ちました。と、忽ち上半身は蛇體に變つてしまつて、助けを呼ばうにも聲は出ず、もう其の時は手もありませんでした。か

らだは一人手にうね〳〵と水の中をうねつて流れを下りました。そして女川が荒川に合する處の乙女ヶ淵に出た時は、すつかり大蛇になつてしまひました。

自業自得とは云ひながら、妾は此の世に緣薄く、かうして生きながら蛇体に變つて荒川を溯り、今は此の折峠を七卷半卷いてゐるのであります。

初め、妾が川に辷り落ちて間もない或日のことでありました。同じ川邊に蛇食の村人が幾人も松明振り翳して立ち騒いでゐるのを見ました。その中に妾の最愛の二人の子供と夫とが泣き叫んで我が名を呼ぶのを聞きました。妾は此の醜い姿を恥ぢて乙女ヶ淵の底に隱れながら、或る殘忍な事の行はれるのを豫想すると、居ても立つても居られなかつたのです。しかしどうする事も出來ませんでした。

それから三日目の朝でした。

騒ぎも鎭つたので、そつと水面に頭を擡げてあたりを見廻すと、水の淀む一方の岸の岩陰に、口惜しや、可愛い〳〵二人の子供と夫との死骸を見出しました。妾が蛇体に變つたのを聞き傳へた村人は、何の罪もない子供と夫とを共に魔性のものに違ひな

いと無理無體に引立て、あさましや生きながら簀卷にして女川に投げ込んだのです。

妾は幾日か村を睨んで泣きました。

其の果に、三人のために復讐してやることが最も功德になると考へましたので、それときめてから今日が丁度三年目。其の間の修業空しからず、愈〻明日から七日七晩大暴風雨を起し、荒川の水を貝付で堰き止めて、關谷女川の兩村を泥の海に化し、一人も殘さず殺し盡してやるのです。

そなたを露聊かも害はうなどゝは思ひ設けません。夜明けを待つて早速茲を去つて下さい。琵琶を聞せてたもつた謝恩に、そなたにだけ私かに知らせるのです。

若し妾が未だ實行せぬ中に此の事を口外したら、そなたの命はたちどころに無くなるものと思つて下さい」。

聞いたお倉の驚愕は一通りではありませんでした。

口外すれば己が命は其の場に終る。告げねば二村の人畜は全滅する。己一人助らうか、身を犧牲にして惠を受けた村人に恩を返さうか、暫く迷うてゐましたが、「さうだ

一命を捨てゝも多くの人を助けねばならぬ」と、決心して女に向ひ、

「お恨みなさるのは一々御最もであります。しかし、左程の神通力を得たそなたでも、此の世で一番嫌ひで叶はぬものがありませうね」と、お倉は何氣なく訊ねました。

「一番嫌ひなものは鐵、これにはどうしても叶ひませぬ。鐵の幾本が我が身に觸れたが最後、妾が命は永久に終るのです」と、答へました。

折柄、嵐が木萱を戰がせて、月傾き、東雲近くなつたので、女は音もなく何處かへ立ち去つてしまひました。

間もなく夜が明けました。

決死の覺悟をきめたお倉は、琵琶を背負うて嶮しい山道をこけつまろびつ馳せ下り、かくと關谷女川の兩村に報知しました。話し了ると同時にお倉は忽ち血を吐いて後ろざまに倒れて死にました。

非常を知らせる法螺貝や板の音が村中に響き渡りました。

始終を聞いた村中は沸きかへるやうな騷ぎになりました。

村内の鐵器類は悉く集められ、それが異常の早さで幾千本の鐵の杙が作られました。村人は手に〳〵其の杙を持つて折峠を取り圍み、隙間なく峠の周圍に杙を打ち込み、餘りの杙は滅多矢鱈に尾打淵の中に投げ込みました。

其の日の夕方でありました。

西の空に黑雲が現れたと見る間に、尾打淵の水面は波立つて來ました。村人はまた一齊に淵の周圍に集つて、鐵の釘を淵に投げ込みました。此の時水底にあたつて微かに悲鳴の聲が聞えました。

と、忽ち大風が吹き起つて黑雲を捲き、土砂を飛ばし、小石を飛ばし、梢に號んで、山谷を鳴らし、滿山さながら怒濤の如く、稻妻が颯と閃いて、はたゝめく雷の轟き凄じく淵の表は大波が沸きかへつて、大雨はどう〳〵と幾千萬の銀條を斜めにつき落す。あたりは忽ち幾筋の小川が現出して今にも洪水が起るかと思はれました。

村人は稱名念佛して只家の中に慄へてゐる外、手の下しやうがありませんでした。

三日目の朝になりました。

するとさしもの大暴風雨も嘘のやうに霽れ上り、麗かな小春日和になつて、葉末の露は歡喜の光に輝き、禽鳥和鳴して萬物始めてこゝに甦りました。

其の日でありました。

村人が連立つて尾打淵に行つて見ると、身の毛も弥立つ大蛇の死体が無數の傷を蒙つて、赤黒い血潮の水面に浮いてゐたさうであります。

其の後、お倉は二村の命の親であると云ふので、關谷村下關にお倉神社として神に祀られ、御神体はお倉が遺愛の琵琶であります。お倉の着物は村の寶として永く里正の家に珍藏され、當時の鍛冶屋の跡は鍛冶屋敷とて今に殘つてゐます。

折一家四人も神に祀られて村人から忘れられません。

折峠、尾打淵、女川などは、此の事あつて以來何れも名づけられたのださうであります。殊に尾打淵は、大蛇が折峠を七巻半巻いてゐる時、尾で水を打つたために深く

掘れたのだといふことであります。

源内婆が池

長岡から栃尾へ通ふ縣道に沿うて、浦瀬といふ部落があります。其處から山へ這入つて行くと、鬱蒼たる森に圍まれた一つの池があります。油を湛へたやうな青黑く毒々しい水は、重苦しさうに青葉の影を映じ、あたりには濕つぽい綠の黴びたやうな氣が漂うて、神祕な囁きを聞くやうにさへ思はれるのです。

昔、此の池の附近に源内婆と呼ぶお婆さんが住んでゐました。至つて陰氣な性質で、また非常に信心深い、ちよつと氣が狂つてゐやしないかと思はれるふしもありました。

或る日のことであります。

源内婆はお寺へ參詣に行つた歸り道に、其池の端を通りました。すると、急に池の面がざわ〳〵と波立つて來たので、源内婆は風もないのに不思議だと思つて、立ち止まつ

てぢつと見てゐると、水が兩方へさつと割れて流れて、いとも尊い上蔕がひよこり水上に出現ましまし、源内婆に向はれて宣ふには

「善哉々々。我、汝を待つこと久し。汝、日頃の厚き信心に愛で、今日より此の池の主たることを許すべし。ゆめ〳〵疑ひて躊躇することあるべからず」と、さながら金鈴を振るやうな聲でありました。

「はつ」と、感極まつた源内婆は思はず頭を下げました。

水面はもとの靜寂にかへりました。

源内婆が再び頭を上げた時には上蔕の姿はもう無かつたのであります。

源内婆は水面に向つて無性に三拜九拜して、尊い上蔕の出現に隨喜の涙を流し、奇聲を發して譫言(うはごと)めいた事を口走り、夢中に飛んで家に歸つて來ました。

「婆さんの樣子が少し變だ」

家人は耳打ちしながら源内婆の一擧一動に注意してゐました。

源内婆は常になくはしやいで奥の間に這入りました。

中々出て來ないので家人が心配してそつと部屋を覗いて見ると、源内婆はいそ〳〵として晴着に着換へ、髪を撫で、多くの簪をさしてゐるのです。

「愈〻狂つた」

家人が話し合つて眉を顰めてゐると、そこへ源内婆は盛裝して出て來ました。

「わしはこれから神樣になるのだ」と、どん〳〵件の池の方へ駈け出したのであります。

「さあ大變だ。それ追つかけてつかまへろ」、

家人は總出で跣足になつて追つかけましたが、其の時に限つて源内婆の足の早いこと、さながら宙を行くやうで、とても老人の足とは思はれませんでした。

到頭、途中で其の姿を見失つてしまひました家人は、一旦村に引きかへして近隣の人々に應援を頼んで、其の日一日一晩、源内婆の行方を搜しましたが、一向手がかりがありませんでした。

無いのも道理、源内婆は其の日の暮れ方、お寺の鐘が鳴り渡る頃、喜び勇んで池の

中に沈んだのでありました。

翌日、家人は更に新手を以て捜索を始めましたところ、池の畔に源内婆の下駄を發見しました。

「さては池に沈んだに違ひない。せめて死骸なりとも見たい」と、擧つて池の水をかへ始めましたが、いくらかへても水量が減らないのです。困じ厭んだ一同は、水をかへることを斷念しなければなりませんでした。

かうして源内婆の死骸は遂に見つけることが出來ませんでしたが、不思議なことにはそれからと云ふものは、池の水は如何に旱魃な時でも、減つたと云ふことがないさうであります。

白狗碑

一

鶴龜の松を左右に見て「花は千咲く」と、唄はれた長岡市外悠久山公園の若櫻の並木のトンネルを過ぎて行くと、森々として夏なほ冷氣を覺える老杉の間に數十級の石段がある。これを男坂といふ。坂を上つて華表を潛れば蒼柴神社の拜殿に出る。祭神は舊長岡藩主で牧野家中興の英主であつた忠辰公と、公が其の謙讓の德を慕はれたといふ事代主命とを合祀してある。こゝから左に轉じて招魂塲を右に見ながら女坂を下つて行くと二つの小池がある。そこには尺にあまる鯉魚が縱横に游泳してゐる。道はこゝで里道に合して盡きる。其の盡きる處。左に祀るは神明宮で、右には荒れた一丘が

ある。主に投げ捨てられたのが辛うじて土に獅噛みついたやうな痩櫻が、地を這ふやうな藪椿や小笹の中に混つて斜に立つてゐる。其の藪蔭に一基の古塚が微かに認められるであらう。其の蝕みかゝつた青石の碑面には「白狗碑」と彫りつけてある。それは故縣令永山盛輝翁の筆になつたもので、其の碑については世にも奇しく悲しい一場の哀話がひそんでゐるのである。

二

元祿の頃、中澤村の里正に善兵衛といふ人があつた。其の家に一疋の大きな犬が飼つてあつた。尾は毳々として雲を卷き、眼は凛々として鈴をかけたやうで、全身丸く肥えて雪を欺く程白かつたから、其の名を白と呼んでゐた。

白は夜は善兵衛が忠實な門番であつた。晝は村童の仲間に雜つて戰爭ごつこやかくれ鬼、山でも川でも子供等の在る處は必ず彼の伴はないことはなく、廣くもない中澤

村の隅から隅まで己が天地として駈け廻つてゐた。

或る年のことである。

此の地方に珍しい大雪が降つたことがあつた。野も山も一面の銀世界になつて、地上には黑い影が殆んど見られなくなつた。

食に飢ゑた狼は次第に人里近くに出て來て、荐りに鷄犬の類を捕り食つた。人々は安い心もなかつた。

或る晩のことである。

恰度寒月が鋸山の齒を出る頃、物凄い叫び聲が山谷に反響して、中澤村に一疋の狼が現れた。

家々は皆戸を鎖し、人々は息を殺して恐しさに只慄へてゐた。

其の時

「ワン、ワン、ワン」と、白の吠える聲が殺氣を帶びて村はづれに聞えた。すると、

「ウオウ」と、狼の叫び聲が威すやうに響いた。

さてはと思うてゐるうちに、忽ち凄じい咬み合ひの音が起つて、慘憺たる戰鬪の開始されたことがわかつた。人々は恐る〳〵小聲に其の勝負の當推量などをし合つて白の身の上を案じてゐた。

暫くして叫び聲は收つた。

「どちらが勝つたか」

「白がやられたんぢやないかしら」などと、人々は我がことのやうに心配してゐた。

居ても立つても居られなかた善兵衛は、叫び聲が收つたので、堪らなくなつて外に出て見た。

異形の黑雲が渦を卷いて空を走つてゐた。其の間を拔けつ潛りつ凄い月が雲に逆らて突進してゐた。一面に白く氷つてゐる雪の大地は寒風に研ぎ立てられて、無數の錐の刃のやうに光つては又曇つた。吹く風が刃のやうに痛かつた。

すると、白がすた〳〵歸つて來た。しかもひどく疲れた樣子もなく、体軀についた血を拭りに舐めてゐるではないか。善兵衛はあまりの嬉しさにいきなり白の頸を抱い

て頰ずりしながら其の大功を賞揚し、それから體軀中を檢べて見たが傷一つ豪つてゐなかつた。善兵衛は今更ながら白の勇猛に驚異の眸を瞠つた。

夜が明けた。

善兵衛は早速下男を連れて昨夜咬み合ひの行はれたと思はれるあたりに行つて見た。

咬み合ひはすぐ村はづれで行はれたのであつた。あたりは一面に血痕と搔き拐つた毛とに滿ちて、荒々しく蹴散された雪は其の儘赤黑く凍つてゐた。

數ヶ所の痛手を負うた狼は血塗れになつて、小牛程の體を半ば雪に埋められて牙をむき出し、見るも凄愴な最後を遂げてゐた。

追々集つて來た村人は此の有樣を見て口々に白の勇猛を嘆賞した。

評判は忽ち傳つて白の勇名は城下に一時に高くなつた。

恰度、其の頃、藩主忠辰公領内巡視の事があつた。其の砌白の噂を聞かれた公は態

々駕を枉げて里正善兵衛が家に到られ、白を見ていたく其の武勇を賞揚されたので、善兵衛は身にあまる光榮として獻上を願ひ出た。公は早速嘉納あつて城内に曳かせられ、翁丸と名づけていたく寵愛されてゐた。

三

翌年忠辰公は江戸詰なので、留守中の翁丸の手當萬端を細々と申し付けて出發せられた。道中恙なく公が芝愛宕下の上屋敷に到着されて間もない日のことであつた。門前に忽然として現れた一疋の巨狗があつた。あたり憚る氣色もなく悠々として屋敷内に這入らうとするので、居合せた門番共は棒を以て追ひ拂はうとしたが、いつかな逃げようともせず、棒の下を搔い潜つては飛びかゝらうとするので、門番共はもて餘してゐると、恰度其の時、門に差し蒐つた一人の藩士があつた。其の士は騷ぐ門番共を制し止め「翁丸、翁丸、」と、呼ぶと、犬は尾を振つて狎れ狎れしく近寄つて來た。

「よく似てゐると思つたが、さては翁丸であつたか。御門番衆決して疎忽あつてはなりませんぞ」と、堅く戒めて、重臣を經て此の事を公のお耳に達した。

忠辰公は不思議に思はれ、庭先へ廻させて御覽あると、翁丸は嬉し氣に尾を振つて吠え立てるので、公の御機嫌斜ならず、

「百里の長途を我を慕うてよくこそ來た。さても主思ひの健氣な翁丸よ」と、一入御意に叶ひ、それから寵愛愈々加はつて、翁丸は並びない幸福な月日を江戸の上屋敷に送つてゐた。

或る日のことであつた。

尾州公の鷹匠が主君のお犬を連れて牧野公上屋敷の門前を通過した。お犬は常に主君の威力を笠に著て各所を横行してゐたので、此の時も門内に眠つてゐた翁丸を一脅しに威嚇して過ぎようとした。翁丸は大いに怒つてお犬に飛びかゝつた。

「尾州公のお犬にもしや怪我でもさせたら、後日どんなお咎めを蒙るかもわからない」と、思つた門番共は慌てゝ翁丸を抱きすくめて態と叱りつけた。

すると尾州公の鷹匠はすこぶる横柄に、

「いやなに御門番、御遠慮御無用てムる。いかな猛犬と闘うても決してひけを取るやうなお犬てはない。お方の犬こそ一命に障らうもしれぬ」と空嘯いた。

門番共は其の高慢な云ひ草がぐつと癪に障つたので、いつか翁丸を抑へてゐた手がゆるんだ。すると翁丸は疾風の如くお犬に飛びかゝり、喉元を銜へて一振り振つた。格闘どころかお犬は悲鳴をあげて遁れようと藻掻いた。鷹匠も門番も今更驚いて漸く引き分けたけれども、お犬は既に其の時片息になつてゐた。驚いた門番共は慌てゝお犬を門内に抱きこみ、水よ薬よと立ち騒ぎながら暫く介抱したところが、其の甲斐あつて少しく元氣づいて來た。門番共は罪もない翁丸を矢鱈に叱りつけ、平身低頭して鷹匠に詫を入れ、酒食の饗應をしてかへした。

後難を豫想した門番共の胸中安からぬ日が續いた。しかし鷹匠は己が落度を發表もならず、密かに治療を施したので、お犬は日ならず全快し、事件は表沙汰にならずに濟んだ。

それから暫く後のことである。

どうして知れたか其のことが忠辰公のお耳に這入つた。

或る夕方公は庭にあそび戯れてゐる翁丸を見て「此の喧嘩好き奴が」と、きつと睨まれた。翁丸は恐れてぢつとすくんでゐた。

翌日から翁丸の姿が見えなくなつた。家來共は心當りをあちこち隨分捜し廻つたが、皆目其の行衛がわからなかつた。

偶〻公は國許に急用のため使者を立てねばならなかつたので、其の序に國許で翁丸の行衛をも捜索させられたのである。

四

翁丸は長岡に逃げ歸つてゐた。併し彼は何と思つたか城内へは歸らないで、中澤村の舊主人善兵衛が家に這入つて行つた。聲ききつけて玄關に出た善兵衛は、玄關式臺

に前足をかけ尾を振つてゐる白の頭を撫でさすりながら勞つてゐたが、ふと氣がついて、

「一旦城内へ獻上したものが復我が家に戻るいはれが無い。物など與へたら里心がついて此處を離れまい。早く追ひ返せ」と、下男に吩咐けて門外に追ひ出させた。

翁丸は悄然として立ち去つた。江戸を出てから此の方長の道中碌々食餌も取らなかつたと見えて痛く痩せ衰へてゐた。彼はさながら罪ある身が隱れるやうにしてよろめきながら、善兵衛が屋根續きの畑の中に這入つて行つたが、夜になつても其處を去らうともせず、明け方近くまで悲鳴をあげてゐた。

其の翌日である。江戸からの使者が善兵衛を訪れ、翁丸が事の始終を語り、其の行衛を訊ねた。さうなると善兵衛も疇昔の翁丸の樣子に不審を抱かずには居られなかつたので、家内の誰彼呼び集めて其の行衛を搜させ、自らは使者を案内して昨夜悲鳴をあげたあたりを心當てに尋ねたところが、すぐ近くの畑の隅の小高い處に翁丸がゐた。しかし、いつもならば主人の姿さへ見れば眞先に驅けつけて、飛びつき裾に戯れるのに、其の時に限つて翁丸よ白よと幾度呼んでも動かばこそ。怪しんで近寄つて見れば、哀れ！翁丸は蹲つたまゝ既に息は絶えてゐたのであつた。

人々は互に言葉もなくて俯向いた。見れば肉は落ちて骨は稜々と高く、双肩聳えて雪の山正に崩れんとしてゐるではないか。兩眼は堅く閉ぢて曉の星光は永久に消え、毳々の尾はしほれ、紫の鼻も色が褪せてゐた。昨夜善兵衛を訪うたは末期を知つて訣別の意か、悲鳴の歇んだは絶命の時か、端然と蹲踞したまゝ善兵衛が屋根を打ち仰いで、生けるが如く餓死してゐたのは、流石に適れ勇犬が最期と人々と一入哀れを催した。

「白よ、許してくれ。お前はどんなにか舊主が戀しかつたことであらう。さうと知つたら好きなものでも飽く程食はせたかつた。心往くばかり撫でさすつてもやりたかつた。せめて一夜なりとも我が軒下で安らかに永久の眠りにつかせたかつた」と、善兵衛は暫し涙に暮れてゐたが、やがて氣をとり直しこれが施主となつて遺骸を厚く葬つたのが、白狗の碑によつて今に殘る犬塚である。

馬鹿な兄

一

昔、或る處に一人のお人好しの馬鹿な兄がありました。或る日のこと大層飴が嘗めたいといつて、子供のやうに駄々を捏ねて強請むので、父親は、

「五月蠅い、分らんことをいふ奴だ」と、一時は怒つても見ましたが、さて馬鹿な子ほどまた一層不便になつて、それでは今日こそあの手製の飴を取り出して、飽く程嘗めさせてやらうと考へました。

そこで父親は默つて飴を作つて置いた二階に上つて、飴の出來工合を見ました。ところが恰度よい嘗め鹽梅になつてゐたので、早速二階から馬鹿な兄を呼びました。

馬鹿な兄は、

「何事であらう」と、階下へ飛んで行つて二階を見上げました。すると父親は、

「これ兄や、今日こそお前に飴を十分嘗めさしてやるぞ」と、いひました。之を聞いた馬鹿な兄は嬉ばしげな奇聲を發し、手を叩き足を踏んで喜びました。

暫くすると父親は、

「今、二階から飴の這入つてゐる甕を下すから、兄や、下からその尻を抑へるんだぞ」

と云ひました。

「尻を抑へるんだね。いゝとも」と、馬鹿な兄は安請合して、いそ〳〵と喜びながら答へました。

父親は大きな飴甕を淡暗い二階の端に持ち出して來ました。そして、

「兄や、いゝか、そら下すぞ。しつかり尻を抑へたか。手を離すぞ、いゝか」と、淡暗い處からまた念を入れながら、甕を兩手で持つてそろ〳〵と下へ下げました。

「いゝとも、大丈夫。しつかり抑へた」と、馬鹿な兄は力の籠つた聲で答へました。

「よし、それ離すぞ」と、父親がパッと甕を手から離しますと見る間に甕は階下の土

間へ叩き落ちて粉微塵になり、飴が四邊に流れました。之を見た父親は烈火のやうに怒つて二階から飛んで下り、こはれた甕を呆然として見てゐる馬鹿な兄の頭を、欠けて飛ぶ程なぐりつけました。

「馬鹿野郎。だからくどい程念を入れて、しつかり抑へろといつたぢやないか。どこを抑へてゐたんだ、阿呆奴」と、父親は息を喘ませ顔を眞赤にして、怒れる聲で馬鹿な兄を叩きつけました。

べそをかいた馬鹿な兄は、何が何やら薩張り分らず、兩手でしつかりと自分の尻を、指が肉に喰ひ込む程抑へながら、

「尻を抑へろといふからこんなにしつかり尻を抑へてゐるのに……親父の氣狂ひ奴」と、土間の隅に腰を屈めて、おど〳〵してゐました。

しかしそのために、折角丹誠の飴は畫餅に屬し、父親のなさけは徒になつてしまひました。

二

その中に、此の馬鹿な兄も年頃なので、媒介する者があつて、近村から嫁さんを貰ひました。所謂「媒介口」といつて、媒介といふものは兎角双方のよい處ばかりを擧げて、惡いことは言はないものです。此の媒介人も男の馬鹿なことは一口も女の方に話しませんでした。

それで女は男の馬鹿なことは少しも知らずに、愈々共同生活に入りました。

馬鹿な兄の父親は、夜晝ほとんど若夫婦の側を離れないやうにして、男の足らぬところは補ひ、へまなことは笑ひに紛らして、うまく機をとつてゐました。

然し隱すより露はるゝはなしで、日數がたつに從つて男の馬鹿なことが薄々嫁さんに分るやうになりました。

そのうちに盂蘭盆が來て、嫁さんは里方へ泊りに行きました。そして男の足らぬことを兩親に打ち明けて嘆きました。之を聞いた兩親は、

「それは大變なことをしてしまつた」と、後悔しましたが、今となつてはもう取りかへしがつきません。娘に因果を含めて慰めながら、果してどの位馬鹿であるか見てやらうといふので、日を定めて馬鹿な兄を招待しました。

さあ馬鹿な兄の父親が心配しました。親の手許に居る時は、それでも蔭になり日向になりして足らぬところを補ひ繕ひもするが、一人他人の中へ手離すとなると、すぐ馬鹿があらはれるに極つてゐる。

「困つたことが出來たが、何か宜い方法はないか」と、日夜思案に暮れてゐました。が、下世話にいふ「馬鹿につける藥はなくて、今更、つける智惠も見當りませんでした。

その中に定めの期日は來ました。

そこで父親は、晴着に着換へた馬鹿な兄を前に呼んで、

「これ兄や、愈々行く日が來たが、嫁のうちへ行つても決して自分の方から餘計な口を利いてはならんぞ。口は禍の門といつて兎角ボロが出易いものだ。先で何か訊いた

ら、はい、とか、いゝえとか返事をして、その外のことは決して饒舌るんぢやないぞ……さう〳〵只一つ此方から先方を褒めることがある。それはな、嫁のうちの一番よい座敷の床の間の柱にふし穴がある。お前が行つたら、先ではそれでも可愛い娘の婿だもの、屹度その座敷に通すに違ひない。そしたらな、床柱を見て――これは寔に珍らしい結構な床柱ですが惜しい事にはふし穴がある。この儘にしてをくも風流ですが、いつそ埋木でもなさつたら如何ですか――と、かういつて褒めるるんだ。よいか。その外のことは決して饒舌つてはならんぞ」と、堅く戒めて門口まで送り出しました。

三

嫁さんのうちへ行かれるといふので無性に喜んではしやぎ廻つてゐた馬鹿な兄は、父親の心をこめた戒も上の空に聞いて、いそ〳〵と出かけて行きました。

途中を急いで嫁さんのうちを訪れた馬鹿な兄は、先づ寒暄の挨拶を無事に濟ませま

した。すると父親の想像通りの一番よい座敷に通されて、茶菓の饗應がありました。

嫁さんの兩親が揃つてまかり出で、迭に色々と世間話をしかけますれども、馬鹿な兄は父親の戒を守つて決して餘計なお饒舌はしませんでした。只だ部屋の天井や色々の飾りつけなどを眺め廻しては、絶えず笑顔を作つてゐました。

嫁さんの兩親は、

「これなら娘の嘆く程の馬鹿でもないらしいわい」と、いくらか安堵の思をいたしました。

するとよい頃合を見計つてゐた馬鹿な兄はもうよからうと、徐ろに主人に向ひ、

「これは寔に結構な床柱ですが、惜しいことにはふし穴があります。この儘にして置くのも風流ですが、いつそ埋木でもなさつたら如何です」と、云ひました。

これを聞いた嫁さんの兩親は心の中で驚きました。そして、

「これなら馬鹿でも何でもなかつた」と、互に案に相違した喜びの目と目を見合せて微笑みかはしました。

やがて晝飯も事なく濟みました。すつかり安心した嫁さんの父親ははじめて對等の氣持で馬鹿な兄に向ひ、

「實は此の間馬を一頭買ひましたが、一つ見て下さらんか」と、うち寛いで言ひました。

すると馬鹿な兄は乘氣になつて、

「馬ときては何より好きなものです。一つ目の正月に是非見せて戴きませう」と、そこで二人連れ立つて厩に行きました。

馬鹿な兄は馬の體をあちこち撫でさすりながら、仔細に見て荐りに褒めました。嫁さんの父親は自慢の馬を褒められるので、一人悦に入つてゐました。

最後に尻の方を見てゐた馬鹿な兄は、徐ろに嫁さんの父親に向つて、

「これは寔に結構な馬ですが惜しいことには尻にふし穴があります。この儘にして置くも風流ですが、いつそ埋木でもなさつたら如何です」と、云つたといふことであります。

虹は地獄の鍋の鉉である

越佐地方で行はれてゐる迷信を思ひ出すまゝに書いて見る。

一、虹は地獄の鍋の鉉である。

二、猫が草を嚙むと近い中に雨が降る。

三、火事の時、女の湯文字を高く張ると、其處から自分の方に火が來ない。

四、帯を逆さまに立てると來客が早くかへる。

五、下駄に灸を据ゑると其の持主は早くかへる。

六、端午の節句に菖蒲湯に這入ると、其の年は蛇や蝮に咬まれぬ。

七、夕燒のあつた翌日は天氣がよくなる。

八、朝燒の日は後で雨が降る。

九、穿いた下駄を足で前に投げ、裏が出ると翌日は雨が降り、表が出ると天氣がよくなる。

一〇、蠑螈は咬みつくと雷の鳴るまで離さぬ。

一一、溺死體の行方の判らぬ時は、舟に鷄を乘せて搜索すると、死體の上に舟が來た時、鷄がときを作る。

一二、三日月が縱になると暫くして米の値が上る。

一三、鷄が宵どきを作ると凶事がある。

一四、降雪量の多い年は豊作である。

一五、其の年に死に事のある家に燕は巣食はぬ。

一六、鼠が退去すると、其の家に火事がある。

一七、食事して直ぐ寢ると牛になる。

一八、雷鳴の時に臍を出してゐると雷獸にとられる。

一九、丙午生れの女は其の夫を殺す。

二〇、葬式の時、烏が來ないと近い中にまた葬式がある。

二一、夜、爪切ると親の死に目に逢はれぬ。

二二、溺死するのは河童に肛門を拔かれるのだ。

二三、嫁は其の里方から猫を貰つて來るものではない。

二四、耳が痒くなると後によい事がある。

二五、盆の十三日に雨が三粒降つても其の年は惡作である。

二六、烏の啼き眞似をすると唇に腫物が出來る。

二七、烏の啼き聲が惡いと(悲しいやうに啼くと)其の附近に凶事がある。

雲洞庵血染の袈裟

「雲洞庵の三毛猫が化けた」と、いふ評判がぱつと擴まつた。

或る初夏の事である。あまり評判が高いので、雲洞庵の下男が、其の實否を見屆けてくれようと、人が皆寢鎮まつた頃、いつも猫の寢てゐる部屋の障子の破れ目から、そつと息を凝して中を覗いて見た。

三毛は部屋の隅に丸くなつて寢てゐた。

暫く何事もなかつた。

九つの鐘が鳴つた。庫裡の方から鼾の聲が聞えてきた。

すると今迄よく眠つてゐた三毛がむつくと起き上り、背延びをして口のあたりを舐めながらあたりを見廻してゐたが、くるりと宙返りしたかと思ふと忽ち十七八の若衆

にかはつた。

はつと驚いた下男はなほも息を殺して見つめてゐると、今度は疊の合せ目から豆絞りの手拭を出して頬冠りして、障子を明けて臺所の方へ出て行つた。

下男は股の慄へるのを感じた。

間もなくかへつて來た若衆は豆腐箱をぶら下げてゐた。

雨戸が音もなく明いた。

若衆は沓脱ぎの上の下駄をつつかけて外へ出た。見失ふまいと下男が怖々ながら沓脱ぎに片足をかけた時、若衆は庭先の木蔭の闇に吸ひこまれるやうに消えて行つた。

そして、

「猫だ猫だと仰有いますな。下駄穿いて杖ついて絞りの浴衣て來るものを」と繰りかへし繰りかへし謠ふ澄んだ其の若衆らしい聲が、暫く夜嵐に送られて聞えて來た。

下男は色を變へて己が部屋に飛び込むが早いか、頭から夜具をすつぽり冠つて震ひながら小さくなつて寢てゐた。

翌朝である。下男は早速方丈に昨夜の一部始終を物語つた。方丈は聞く度毎に奇異の感に打たれ、

「さてさて不思議なことを聞くものかな。正しく妖怪變化の術を會得したのであるならばもう寺には置けぬ……よしよし三毛を呼べ」。

下男は恐しいので遠くから三毛を呼びながら連れて來た。すると、愈ゝ發覺したと思つたのか、三毛は常とは打つて變つて悄然と方丈の前に蹲つた。

其の樣子をぢつと見てゐた方丈は、直覺的に昨夜の事が事實であつたといふことを讀んで取つた。

下男は猫の背に昨夜の若衆が幻に見えて、しかもそれが自分を怨んでゐるやうなのが恐しくて堪らないので、顏を背けて勉めて餘所事を考へるやうにしてゐた。

「これ三毛、貴樣はもういつの間にか立派に神通力を得てゐたのだ。もうさうなつては此の寺に置くことは出來ぬ。さあ今日限り暇をやるから何處へでも出て行つてくれ」と、方丈は三毛に云ひ渡した。

すると、三毛は二聲三聲悲しさうに鳴いて立ち上り、暫く何ものかに耳を澄す樣子であつたが、やがて何處ともなく其の姿を隱してしまつた。

それから二三年後のことである。

松を殘して草木は皆一樣に黃色くうら枯れ、眼前に聳え立つてゐる國境の山々には早や白いものが見え初めて、軈て此のあたりに雪を齎す北風が梢に吼え渡り、毎日氷雨が降り續いて淋しく物悲しい或る秋の日の夕方であつた。

破れ笠に破れ桐油を着た一人の見窄しい男が雲洞庵を訪れた。

其の男は方丈に面會して不思議な豫言をした。

それによると、

「今日雲洞庵の檀家の××長者の後室が逝く。そして其の葬式當日には不意に惡魔が現れて死人を奪はうとするから、方丈には其の偉大な法力を以て惡魔を降し、廣大無邊の佛法の功力を衆生に示されたら、一つには弘通の便りともなり、二つにはお寺の

榮えともなるであらう……何を隱さう、自らは先年お暇を戴いた三毛猫である。永年養はれた萬分の一の御報恩に、此の事を知らせんために參つたのである」。といふのである。

方丈が氣がついた時にはもう其の男の姿はどこにも無かつた。方丈はまるで狐にでも魅せられたやうな氣がして、部屋の中をあちこち歩きまはつてゐた。すると、俄かに玄關に人の氣配がして、豫言通り××長者の後室の死去を報じて來たのであつた。

方丈は急に其の葬式當日に於ける大なる責任と不安とを感じた。

葬式の當日は來た。

幾日か降り續いてゐた雨は、其の日の朝になつてからりと霽れた。

桔梗色に輝いて美しく鮮かになつた空の下には群巒の頂が浮いてゐるやうに見えた。日の光は一面に照りつけてぎらぎらしてゐたが、甚しい暑熱は感じなかつた。名に負ふ長者の後室の葬式である。多數の會葬者や見物人や人足や傍居の群で大混雜を

極めた長者が廣い邸内は、騒立つてゐる中にも、沈んだ淋しい色と氣が漂うてゐた。

出棺の時刻になつた。

輿に乗せられて、多くの若者に舁かれて再び歸らぬ門を出た柩は、此の世ながら極樂の花に飾られ、多數の僧侶や會葬者の蜒々たる行列に圍繞されて、今闌な秋色を誇る野山の間を練つて行つた。

鉦鼓の音は和して迦陵頻迦の鳥の音の如く虚空に花降り音樂聞えて、諸佛菩薩がさながら袂を連ねて目のあたり御來迎のありさまであつた。

やがて式場についた。

柩の前で有難い、涙ぐましいお經のコーラスが湧き起ると、人々は今更ながら無常を感じて哀別離苦の涙に咽んだ。

引導を渡す時になつた。

すると俄かに金城山の一角から異形の黒雲湧き起つて、見る間に空一面にひろがつたと思ふと、天地が晦冥になつた。

電が刃の如く虚空を斜に劈き閃いた。烈しい雷鳴が天地を震動させて轟いた。大雨が瀧の如く地上に突撃した。其の時である。

渦卷く黒雲の中から爛々たる二つの眼を光らせた一疋の虎のやうな怪物が、雲に乗つて柩の上に舞ひ下り、鋭い二つの牙を鳴らし、耳まで烈けた眞紅の口は威嚇の叫びを吼えて、今にも柩を攫み去らうとした。

多くの會葬者は何れも肝を冷し色を失ひ、こけつ轉びつ、無我夢中で逃げ散つた。

其の時、逸早く袈裟をとつて柩を掩うた方丈は自若として動かざること巖の如く、猛雨の中に立つて一心不亂に讀經を續けた。

暫くの間は怪物と方丈と睨み合ひの形であつたが、尊い讀經の聲が凛として壓迫するやうに四方にひろがると、怪物の五体は痺れたやうに痙攣り、ぶるぶる四足をふるはして悶え苦むと同時に、かつと袈裟の上に血を吐き、悲鳴をあげて黒雲の中に逃げ去つた。

すると猛雨は忽ち歇み、電光雷鳴も收つて、霽れ上つた美しい空には太陽が燦爛と輝

き、しとどの雨に濡れた下界のすべては金色の光を照りかへした。

「お痛しや、方丈さまは八つ裂きにされたことであらう」。

「柩もよもや無事ではあるまい」。

「何の報いで死に恥晒すのだらう」などと話し合ひながら、會葬者は怖々式場に戻つて來た。

するとこは如何に。衣は破れて胸はあらはに、全く雨に濡れそぼちたる方丈はたらたらと雫して、輝く日光に燦爛たる審美の靈光を發し、五色の虹を背に負ひ、さながら生ける佛陀の如く、柩の前に合掌瞑目してゐるではないか。

莊嚴の極致、崇美の至極、人々は只其の神姿に無言の法音を聞いて、思はず合掌禮拜した。

法悅の泪に噎んだ××長者は、此の事あつて以來全く發心して佛門に入り、莫大の黃金と多くの珍寶とを雲洞庵に寄進したといふことである。

今でも此の雲洞庵は、魚沼地方はおろか、縣下に於ても由緒ある曹洞宗の巨刹として、諸人渴仰の的となり、靈域は年と共に愈〻榮え行くのである。

五智五如來御利生記

空がぼんやり曇つて、あたりが薄く靄がかゝつて居るやうに薄月がさしてゐた。柔かい、暖かい空氣が顏にあたる。木の下闇や、池のあたりから蛙のだみ聲が聞えた。

處は五智五如來のお堂である。

初夜過ぎてゐた。

琵琶を背負うた若い盲目法師が、長い舗石道をこつこつ杖で探りながら、お堂の階に辿りついた。

杖を階に倚りかけた法師は、兩手で段の上を撫でゝ見てから腰を下ろして、微かに吐息をつき、兩足を延した。

やがて膝の上に兩肱を立てゝ頰杖をついた法師は、頭を垂れて睡つたのか、ぢつと

して黒く動かなかつた。

もうあたりに人の氣もなかつた。

ものゝ一時もさうしてゐた法師は、徐ろに顔を上げて見えぬ眼ながらあたりを見廻してから草鞋を解いてお堂の縁に上り、暫くの間扉の外から五如來を念じてゐた。

それから法師は雨合羽のやうなものを縁の上に布き、其の上に安座を組み、琵琶を兩股の上に載せて柱に凭れ、やがて夢路に入つた。

法師はふと眼をさました。

夜は大分更けてゐた。

境内の草木は枝を延ばし葉をひろげ、動物は身構へて蹲り、石は無氣味な格好に蟠り、何れもぢつと息を殺して法師を狙つてゐるやうに見えた。

周圍に妖氣が漂うてゐるやうに感じて恐しくなつた法師は、からだを前屈みにしてぢつと環境に耳を澄してゐたが、ふと、何か思ひついたやうに勢よく身を起し、端然

と坐り直して傍の琵琶を膝の上に取り、ぢつと身構へて彈き初めた。と、彈きさして帶を緩め、胴卷を取つて膝の前に置いた。

それからまた身構へて撥音高く平家物語を語り出した、冴えた琵琶の音色につれて、幅のある、底力のある、何とも云へぬよい肉聲が、淡明るい境内の生温い空氣を震動させて、木蔭の闇に投げつけられた。あたりは頓に活氣づいて妖氣が四方に窘逐されたやうに見えた。

と、お堂の横手に一つの黒い影があらはれた。

それが音もなくお堂の正面に廻り階を上つて法師の傍に進むと横に長く延びた。腹這ひになつたのだ。

法師は琵琶に餘念がなかつた。

黒い影から手が延びて、法師が膝許の胴卷を攫んだ。

法師は更に知らなかつた。

黒い影は拔足して階を下り、後振りかへつて頰冠りした面のやうな顔に凄い笑を見

せて密かにお堂の横手の闇に消えた。

暫くして法師は長い一曲を語り終つた。

方々から鷄の鳴く音が聞えて來た。

「やがて夜も明けるであらう。そろ〳〵出立の用意をせねばなるまい」と、法師は靜かに琵琶を袋に包んで傍にさし置き、それから膝許にい置た胴卷を探つた。

「おやつ」と、驚愕の叫びを發した法師の五體が一時にわな〳〵と顫へた。

法師は身のまはりから廻廊の隅から隅まで撫で廻つたが、何しにあらう筈がない。

法師はしよんぼり廊の板の上に坐つて見えぬ兩眼からはら〳〵と涙を流し、聲を立てゝ泣いた。

法師は奥州から座頭の位をとるために京都に上る途中であつたのである。途々、靈山靈場には參詣通夜して座頭の位を得られるやう祈願を籠めて來たのであつた。

それに必要な大切な金子である。今それを奪られたら切角これまでの苦心がすべて水泡に歸してしまふのである。

漸く泣き歌んだ法師は涙に濡れて茫然としてゐた。

と、忽焉として法師の心に涼しい悟りの眼が開いた。法師は忽ち心機一轉して胸中の豁然たるを覺えた。

「さうぢや、さうぢや。身に過ぎた願ぢや。決して人を怨むまい。これも佛樣のお諭してある。これから早速故郷に立ち返つて一段の修業を重ねた上で再び京へ上るであらう。さうぢや、未練にも泣いて嘆いた我が身が恥しい。」と、生れかはつたやうに晴れやかな心に甦つた法師は、いと懇ろに五如來に最後の祈願を籠め、

「何卒、身の行末を守らせ給へ」と、幾度も伏し拜み、琵琶を背負うて階を下り、元氣よくもと來た道をひきかへして行つた。

暫くすると法師は家並を出て、淋しい野道へ曲らうとした。

其の道角である。ドーンと烈しく誰か突き當つて來た。

「あつ、痛つ。」

よろ〳〵と法師が倒れかゝつた拍子に兩眼がぱつと明いた。

「御免なさい……おやお前さん眼が明きましたね」。

突き當つた人はびつくりした。

法師はしばらく夢の中のやうな氣持で珍らしげにあたりを見廻してゐたが、

「はい〳〵、眼があきました……幼い時に盲目になつて夜も晝も眞暗な二十何年。それが今突然にあきました。あの大空、あの大海原、おゝ鳥が飛ぶ、白帆が走る、見える〳〵、何でも見える。天地のあらゆる限りが見える。見える、見える」と、さながら狂氣の如く、くる〳〵廻つて踊り出した。

「不思議ですね。つぶれてゐた眼がどうしてまあ急に明いたでせう」。

「どうして明いたか薩張り私にも判りません」。

「……何か思ひあたる事でもありませんか」。

「思ひあたる事つて別にありませんが……只、變つたことゝ云へば昨夜から云ふことがありました」と、法師は胴卷を奪られた事の始終を話した。

突き當つた人は喧と横手を打つて、

「それだ、〳〵。京へ上つて位を取らうと云ふ程の金子をとられても、人を怨まず、自ら身の修業の足らぬを責めて猶ほ一層の修業を積まうといふ、其の美しい心根に如來樣も感應されて、御利生を授けられたのに違ひない。有難い、〳〵。それに違ひない。さあそれなら早速お禮まゐりに戻りませう。私もお伴して身の行末を願ひます」と、二人連れたつて五如來のお堂へ引き返して來た。

境内には小鳥が囀つて薄日がさしてゐた。

ちらほら參詣の人も見えた。

階の下に未だ若い盲目の男が跪いて泣いてゐた。

參詣の人々は大方哀れを催したやうであつたが、誰一人言葉をかけるものもなかつた。

法師は身につまされてすぐ涙ぐみ、男の肩に手をかけて慰めながら、優しくも其の身の上を問うて見た。

と、其の男は見えぬ眼からぽろ〳〵涙を流し、

「はい〳〵、よう問うて下さりました。恥を申さねば罪はなか〳〵消えぬと申します。何を隠しませう、私は昨夜此のお堂で琵琶を彈いてゐた盲人の胴卷を盗んだのであります。今朝起きて見れば其の罰て俄かに眼が見えなくなつてしまひました。それからつく〳〵身の罪障の深いのが恐しくなつて、さつきから如來さまのお慈悲に縋つてゐたところであります」と、泣く〳〵懺悔した。

法師は聞く度毎にびつくりして、其の俄盲目の顔を穴のあく程眺めた。

「さては昨夜、我が金子をとつたは此の男か、でもまあ佛罰の恐ろしさ。それにしてもいたはしや俄盲目になつて起居に不自由のことてあらう。老先永い一生を身の罪とは云ひながら、闇の憂世て暮すのか」と、暫らく同情の涙に咽んでゐたが、

「よう懺悔なされました。懺悔には百の罪も消えると申します。よし人は欺いても神や佛は欺かれるものてはありません。今から心をいれ換へて、もとの善心に立ちかへり、佛樣のお慈悲に縋つたらまた花咲く春に逢ふ事もありませう。必ず信心怠りなく

善根を積んだならば、其の功力でまた眼のあくこともありませう」と、懇ろに慰めてそれから自身は五如來のお前に合掌禮拜して、其の廣大無邊の慈悲によつて眼のあいた事を幾度かお禮申し上げ、つく〳〵其の有難さに感じ入つたと云ふことである。

五

百

年

橋

北蒲原郡笹岡村字上一分と云ふのは、停車場から二里も歩かねばならぬと云ふ邊鄙な村で、一村は波濤のやうにそゝり立つた越後山脈の谷間に散在してゐる。

五百年ばかり昔のこと。此の村端に一筋の幽谷があつて、其處に一つの橋が架けてあつた。橋上から臨めば眩暈を感ずる沈んだ千仞の谷底には常に濛氣が立ち罩めて、陰森の氣が谷一杯に滿ち滿ちてゐた。

ところが其の橋が毎年降り積る雪のために、いつも谷底に落ちてしまふので、其のために村人は俄かに隣村との交通を絶たれ、いたく其の不自由を嘆いてゐた。

或る年の冬のことであつた。

朝早く里正の家の戸を叩く者があつた。里正は寢不足の顏を顰めながら出て見ると、

また例の橋が落ちたと云ふ不吉な報せであつた。時を移さず里正は非常召集を行つて村内の重立を集め、例の橋の善後策について人々の意見を徵したが、毎年のことなので人々の智恵は既に涸れでゐた。進んで架橋に關する新しい意見を發表しようとする者もなく、一座は只溜息の聲ばかりであつた。

其の時、どこからともなく一人の人相の惡い男が案内もなく其の部屋に這入つて來た。

そして、

「私があの橋を明朝までに拵へて上げませう」と、云つた。一座は不意の闖入者に怪疑の瞳を向けた。

「其の代りに私にあの橋を最初渡つたものゝ命を下さい。五百年間は保障します」と、附け加へた。

部屋に靄が漂うた。それが人々の眼の中にすうと吸ひ込まれるやうに這入ると、一同は男の妖術にかゝつて夢のやうな氣分になつた。

「如何にも、最初渡つたものゝ命を差上げませう。が、橋は屹度明朝迄に出來上りませうな」と、里正はうかゝと前後の考へもなく、此の許さるまじきことをいとも容易に許容してしまつたのである。

默つて頷いた男は、さながら自分の仕事でもするやうにどしゝと事を運んで、早速圍爐裡から一箇の火を取つて素手で攫み、里正の前に出した。

「是を契約のしるしに差し上げて置きます」。

里正は驚いて尻込した。

「熱くありません」。

男は其の火を口の中に入れて見せた。不思議に思つて里正が怖々ながら掌に載せて見ると、少しも熱くなかつた。そればかりか里正は男の强迫するやうな眼光に射すくめられて、滔々ながら其の火を堅い契約のしるしとして、餘儀なく預らせられたのである。

重立は皆歸つて行つた。

其の男もいつの間にやら居なくなつてゐた。

里正は預つた火が氣にかゝつて堪らないので机の抽斗をあけて見ると、入れて置いた箸の火の塊は無くなつて、其の跡に一箇の赤い透徹るやうな石が光つてゐた。

氣がつくと白鬚の老人が犬を伴れて里正の後に立つてゐた。

「今朝來た男はお前の命を奪りに來た惡魔である。明朝竣工した橋を人間が渡る前に屹度此の犬を渡して、お前は決して最初渡らぬがよい」と、云つて其の老人は後を向いて闘を出たかと思ふともう姿は無かつた。

翌朝は空がからりと晴れて、雲の影さへ見えなかつた。野山の雪は明るい朝日の光に照されて、燦爛たる金光を反射した。樹々の梢に降り積つた雪が溶けて、荐りに落ちる音を聞く頃、袋に入れた犬を伴れて里正は只一人、例の幽谷の縁に立つた。

契約の橋は既に虹の如く見事に架け渡されてゐた。驚いて里正が眼を睜ると、橋の

向うには昨日の男が立つてゐて、「來い、來い」と、荐りに里正を手招ぎしてゐるではないか。釣られて里正がうかゝと橋を渡らうとした時、袋の中の犬が吠え立てた。里正ははじめて氣がついたので犬を袋から出すと、犬は見る間に駈けて橋を渡つてしまつた。

男は最初に渡つた犬には眼もかけず、怒れる形相物凄く里正に飛びかゝらうとした。其の時である。どこからともなく昨日の老人が里正の前に現はれて、男を睨みながら念佛を唱へ始めた。

射すくめられたやうにたじろいだ彼の男は、無念の悲しい叫聲をあげて身の毛も彌立つ惡魔に變り、虚空遙かに消え失せた。それと同時に老人の姿も犬の影も其處には無かつた。

里正は家に馳せ返つて机の抽斗をあけて見た。

石は昨日のまゝ赤く光つてゐた。取り捨てようと其の石を掴んだ時、俄かにぽうと燃え上つて里正は手を燒いた。封じられてゐた火が元にかへつたのである。

星移り物變つた今でも其の橋は昔ながらの姿を谷間に横へて、此の平和な村に一條の語り草を殘してゐる。

化

杉

中魚沼と南魚沼との郡界をなす大杉山の麓に大杉と云ふ村があります。

今でこそ縣道にも近く、人家も澤山殖えましたが、此の物語のあつた三四百年も前には小さな萱葺の農家が僅かに二三十軒、晝猶ほ小暗い杉の並木に立ち交つてをつたのみで、近くの野山には晝でさへも恐しい狼の叫び聲が絶えないと云ふ淋しい村であつたのであります。

其の頃、此の村はづれに直徑五六丈もあらうかと思はれる一本の大杉がありましたところが其の大蛇のやうな木の根や、山蛭の潜む枝の大屋根のために、周圍何町歩かの間は作物はおろか草木まで生ひ立たぬやうになりました。

そして夏の夕方などは、其の木の影が遙かに遙かに遠く一里も離れてゐる城内村の

長森といふ處までさすので、附近の人々は皆何かの靈であらうと云つて、誰一人として朝夕其の影のあらはれる頃には、これを踏むのを恐れて外へ出るものが無くなつたのであります。

そのために、いつともなく氣味のわるい奇怪な風説が村一杯にひろまり、愚にもつかぬ迷信に囚れて些細な事にも怯える者が多くなつて來ましたので、人々は何か凶變でもなければよいがと日々安い心地もありませんでした。

そこで、これは捨てゝは置かれぬと云ふので、村の古老達が集つて幾日も相談を重ねました結果、其の杉の大木を伐り倒して不祥の源を絶たうと云ふことにきまりました。

愈ゝ木を伐る日になりました。

其の日は仕事を早仕舞にして、選ばれた若者どもは身拵へを嚴重に、各自鉈だの鋸だの鉞だのを用意して、日沒を合圖に名主の家に勢揃へしました。そこで名主から色々の注意を受け、幸先を祝ふ酒を振舞はれて、一同稍もすれば怯える心を勇しい衒氣で包

んで出かけました。

其の夜は月が氣味わるさまでに冴えて、荒れた野山を物凄く照してゐました。山の一角からは狼の叫び聲が絶えず人々を威嚇し、鷄は宵時を作つて、異變の前兆を暗示するかのやうでありました。

村中の人々はいづれも夜なべを休み神佛を念じて、其の成功を祈らぬものはありませんでした。

大杉を取り圍んだ若者どもは一齊に木を伐り始めました。すると不思議や、俄かに泣くやうな唸るやうな怒るやうな聲が次第に高く木の内部から起つて來るではありませんか。一同は内心すこぶる恐しくなつて、次第に斧を振ふ手も緩んで來ました。すると不意に腥い鮮血が一度にさつと瀧のやうに其の切口から迸り出たのでありました。

若者どもは仰反らんばかりに驚いて、皆我先にと夢中で名主の家に逃げ歸りました。

恐怖の一夜が明けました。若者どもは眠られぬ不安の床を出ました。

しかし、不思議ではありませんか、昨夜、若者どもが全身に浴びた筈の大杉の血潮は其の時すつかり消えてゐて、誰のからだにもその痕をとゞめてゐなかつたのであります。そこで早速一同が大杉の根下に行つて見ると、昨夜の血潮も切り口も全く嘘のやうに癒えてゐて、常にかはらず大杉は朝風に木の葉を戰がせてゐたのでありました

さては愈ゝ魔性のものが化けて木にのりうつゝてゐるに違ひない。それと知れたら早速退治して其の正體を見屆けねばならぬといふことになつて、其の晩、またも若者どもは勇を鼓して大杉に向ひました。

するとまた一同は不思議な氣味のわるい聲に脅かされ、血潮を浴びて皆逃げ歸つたのでありました。そしてまた翌朝行つて見ると、大杉は常にかはらず木の葉を朝風に戰がせて、切り口も血潮もすべて無くなつてゐたのでありました。

現今の樣に電氣や爆藥のなかつた時代の事であります。之では手の下し樣がありません。他に名案の出ない限り此企ては永久に中止しなければならぬ樣になりました。

併し、いつそ手を下さない中なら兎に角、一旦手を下したものを其のまゝ放任して置いたら、此のささどんな禍を及ぼすかも知れないと云ふ心配が犇々と村人の頭に湧き起つて來ました。

そこで今度は最後の手段として人數を三倍に增し、大杉の下につめかけ、三組に分れて交代に木を伐り始めました。

大杉は恰も大風の中に立つてるやうに枝葉を顫はせて、切り口からは血を吹き、百萬の地獄の亡者が叫喚するやうな音を立てました。

決死の覺悟をきめた若者どもは、大杉が泣かうが、喚からが、血を吹かうが耳にもいれず、さながら狂者が斧を奪ふやうに夢中になつて滅多矢鱈に伐り立てました。

三日目の夜もほのぼのと明け初める頃でありました。

百雷の一時に落ちかゝるやうな凄じい音を發して、流石の大杉も遂に地響き立てゝ倒れました。同時に全村は大地震のやうに震動して障子は破れ、人々は足の竦むのを覺えました。

木を伐つてゐた若者どもは皆其の瞬間地上に倒れて、全く喪心したやうになつてしまひました。

仰天して戸外に飛び出した村人は、恐る〳〵大杉の傍に集つて來ました。何れも物云ふ事さへ憚るやうに強張つたやうな顔つきで、驚異の眼を瞠るばかりでありました

日出が近づきました。

空は明るく、若々しく、清々しく、空氣はぢつと靜まつてゐました。

やがて太陽が堂々と山の端から上つて來ました。

天地は只莊嚴の氣に滿ちて、燦爛たる光の洪水に萬象は悉く暗い謎のやうな夜の睡りから覺めて活々と甦りました。

嚴正無私な照魔の鏡に照された大杉は、此の時、思ひ儆しか段々細り行くやうに見えました。

「さては愈〻正体を現すか」と、人々は固唾を呑んで見てゐましたが、期待は全く裏切られて、いつまでたつても終に其の姿を變へなかつたのであります。

村人の頭に再び氣味のわるい不安の念が萠しました。其のまゝでは往來にも耕作にも邪魔になつて、とても其の不便と苦痛とに堪へられないのでした。さうだからと云つてそれでは私が其の魔性の大杉を小さく切り刻んで、後始末をつけようなどゝ云ふものがある筈もありません。さりとて此のまゝでは到底餘所に運び去ることも出來ません。

そこでまた古老達が額を鳩めて色々と善後策について評議を重ねたのでありましたが、徒らに日を重ねるばかりで少しもよい智惠が浮ばなかつたのであります。

さうして荏苒日を送つてゐる中に其の年も暮れ、新玉の年立ちかへり一陽來復の春が來ました。

其の冬は例年にない大雪だつたのでありました。

それが雪消えの時節になると、數十年來稀に見る豪雨が幾日も〳〵續いたので、山野を埋沒した丈餘の雪は急に溶け始めて、見る間にあたり一圓は雪塊を交へた濁流の

渦巻く海と化してしまつたのであります。

其の洪水の爲に件の大杉はさながら傷ついた大鯨が逆巻く怒濤に翻弄されてゐるやうに、滔々と漲る濁流に押し流されて終に魚野川に落ちてしまひました。そして一里餘りも押し流されたと思ふ頃、俄然、物凄い唸り聲を發して瞬く隙に其の姿を水中に沒してしまひました。

其の後、盛夏の候など河水が殆ど涸れた時、其の地點と思はれる處に行つて見ても大杉の姿はいづこにも見られなかつたのであります。

其の後、村人は祠を建てゝ此の奇怪にも亦不可思議な大杉の靈を祀つたいふことであります。

八

石

山

刈羽郡北條驛の近くに八石山といふ山がある。

昔、此の山の麓に或る夫婦が住んでゐた。夫婦の間に一人の男の子があつた。夫婦は掌中の珠と愛で慈んでゐた。するとふとしたことから妻は病氣に罹つた。しかしたゞ苟且のことゝ思うてゐるうちに、或る晩、病が急に革つて夢のやうにあの世へ旅立つてしまつた。

後に殘された親子のものは悲嘆の泪に咽んで、一時は途方に暮れたが、如何に歎けばとて死んだ者の甦る筈もなく、さりとて老先永い一生を男ばかりで過されるものでもないので、程經て、世話する人のあるのを幸ひ、後妻を迎へたのである。

後妻は最初の中こそ先妻の子を可愛がりもしたが、自分の腹を痛めた子が出來ると

急に打つて變つて先妻の子を虐待し始めた。

先妻の子は今更のやうに亡き實の母を戀ひ慕ひ、後妻の日々の責め折檻を怨み泣いてゐた。

後妻はそれでも未だ慊らずに、どうかしてもつとひどく先妻の子を虐めてやらうと毎日々々その方法を考へてゐた。

或る日のことである。

後妻は二人の子供に吩咐けて、畑を二つに區分して豆を蒔かせた。そしてその日の夕飯の時に此のことを夫に話して、

「どちらで蒔いた豆が餘計芽を出すかしらん」等と、先妻の子を憎さげに睨みながら空惚けてゐた。

その晩である。

後妻は皆のものが寢鎮るをうかがひ、そつと寢床をぬけ出して畑に行つた。そして晝間先妻の子に蒔かせた豆だけを、悉く人知れずぬき取つてしまつた。

「後になつて先妻の子の蒔いた豆は一本だつて芽を出す筈がない。そしたらあの子は豆を蒔くのを厭うてどこかへ捨てたに違ひない」と、かう寃罪をきせて、夫の見る前で公然と思ふ存分打擲してやらうとたくらんだのである。

ところが、亡き先妻の靈の加護でもあらうか、先妻の子の蒔いた豆がその時只一粒だけ畑の隅に拔き殘されたのである。

翌朝になつた。

すると先妻の子の蒔いた豆の只一粒殘されてゐたのが一夜のうちに芽を出してすばらしい大きな樹木になつて、その鬱蒼たる枝には豆が八石も實つてゐたといふことである。

流石に邪慳な繼母もこれを見ては驚き且つ恐れ、はじめて無明の夢の醒めたる如く己のこれまでの惡心を悉く懺悔したので、それからといふものは一家中春日和煦まことに睦じく暮したといふ。

山の名もその頃から、八石山と呼ぶやうになつたものらしく、今の北條村專福寺の

門は其の豆の大木で作つたものだと云ひ傳へられてゐる。

關山村毛塚の由來

一

鹽澤町の南方數里、關といふ村に續いて關山村がある。道はそこから魚野川を渡つて五十嵐村に至つて窮る。魚野川の流れが急なために僅がの出水にも屢〻橋を流されるので、そこには極めて粗末な假橋が架けてある。河幅が廣いので常は川の中にいくつも島が出來てゐて、橋は此の島と島とを綴り合せた幅一間にも足らないものであつて、しかも板や粗朶を藤蔓や針金で橋桁に縛りつけたものなので、渡れば彈力を帶びて上下に浮動し、慣れぬものは躰軀の中心を失つて歩けぬ程である。一朝大水が出ると其の島は忽ち跡方もなく消えて、橋は流れ兩村の交通は全く杜絶するのである。雪

の積る頃は村の人々が交る交る橋の雪を掘つては僅かに道を通ずるけれども、一夜の中に三尺も五尺も積ることが屢々あるので、さう毎日々々掘り詰めにも掘られず捨て置くと、稀に通る人は橋幅の狹いしかも雪の高く積つた上を渡るのであるから、慣れてゐてさへ時には過つて川に陷り、溺死するものが往々あるのである。

二

いつの頃であつたか、其の關山村の片隅に草庵を結んでゐた源敎といふ六十路にあまる念佛の道心があつた。佛學にはさほど造詣が深いとも見えなかつたが頗る道德堅固で、其のあたりには稀に見る高德の僧であつた。

源敎は毎年冬になると寒三十日の間寒念佛をして夜毎に鉦打ち鳴らして佛寺にまゐり、村内に托鉢して歩いた。其の序に彼は必ず魚野川の橋の上に立つて、毎年幾人となく過つて非業の最後を遂げ水底の鬼になつたものゝために回向をしたのである。そしてどんな吹雪の烈しい寒氣の強い時でも彼は一晩も之を怠ることが無かつた。

或る年の冬であつた。

恰度、彼が寒行の果てる日のことである。其の晩は珍しく穩かで、深海の底のやうな大空には青白い寒さの散るやうな月光が際限もなく充ち溢れてゐた。立木の裸の影が白い雪の肌に黑い傷のやうな影を印してゐた。

源敎はいつもの通り橋の上に立つて回向を始めた。川上の方には薄くぼけた雪の連山が蜒々と柩衣のやうな白線を空に描いてゐた。

俄かに薄暗くなつた。

「おや」と、源敎が空を見上げる途端に、朦朧とした川面からぼうつと青い火があがつた。

「南無阿彌陀佛々々々々々々」

源敎は目を閉ぢて鉦打ち鳴らし、しばらく念佛してから目をあいて見ると、橋の上に、彼を二間ばかり離れて中年の女が立つてゐた。白く青ざめた顏に黑髪をふりかけ今水から出たばかりと見えてしとゞに濡れた袖をかき合せてゐた。

源敎は竦然として背筋が氷をあてられたやうに寒くなり、顏の血が一時に吸ひとられて屍のやうに冷くなつた顏面筋肉は顫へながら皺立つて凍るかと思はれた。

源敎は矢鱈に念佛を唱へた。女は動かうともしなかつた。暫くの時が經過した。源敎は次第に胸の動悸の收まるのを感じた。

「迷へる魂に違ひない。いたわしや、後弔ふ人もないと見える。それにしてもかうして今頃我が前に立つからには、何か此の世に執着があつて中有に迷うてゐるのであらう。不憫な女だ」と、思ふと、彼の心に油然と佛の慈悲が湧いて泪ぐましくなり。

「南無幽靈願生菩提、南無阿彌陀佛々々々々々々々」と、荐りに念佛してゐると、其の女は歩むともなく二三歩前に出た。そしてかすかな聲で物を言つた。

「わたくしは古志郡なにがし村の菊といふ女であります。先年配偶にも子供にも先立たれ、續く不幸に細い煙すら立て兼ねたので五十嵐村の由緣をたづね、救ひを乞はうとして先日此の橋を渡つた時過つて足を踏み外し、水に落ちました。一旦は浮み上りましたけれども水面には厚い氷が張つてゐて上に出る事が出來ず、苦しみ踠いた末は

終に此の姿になつてしまひました。今夜は丁度四十九日の逮夜でありますけれども、悲しや誰あつて一遍の回向をしてくれる身内のものさへありません。然し貴い御坊が毎晩の御回向の功力によつて有難い佛果をば得ました。たゞ此の黑髮が障碍となつて未だに闇浮に迷うてゐます。なにとぞ此の黑髮を剃つて給はらぬか」と、袖を顏にあてゝ潸然と泣いた。

源敎は泪の目をしばたゝいてゐた。

「お痛しや、さういふ最期をとげられたのか……髮剃るのはいと易いことではあるが、今此處に剃るべきものを持つてゐない。明晩、關山のわが庵まで來るならば其方の望を果して上げませう」と、云つた。

女は泣きながら聞いてゐたが、此の時さも嬉しげに首肯いて煙のやうに消えた。すると川面の霧も霽れてまたあたりはもとのやうに明るくなつた。

三

翌日源敎は日頃親しくしてゐる同村の紺屋七兵衛を庵に招いて、昨夜お菊の亡靈に逢うたことを話した。

「今夜は其のお菊の亡靈が此の庵に來るのです。このやうな事は佛緣に疎い人々に語り聞かせて、敎化の便りにしたいと思ひますけれども、確かに其の亡靈を見屆けたといふ証人がなければ、人々は空言と思うて信じますまい。そなたは日頃正直七兵衛で通つてゐる御人だから、どうぞ証人になつて下さい。これも衆生濟度の方便でありますから枉げてお聞濟みを願ひ度うムいます」と、云つた。

七兵衛は源敎と略々同年で、しかも強い念佛の信者であつたから、即座に承知して一と先づ家に歸つて行つた。

後に源敎は佛に供養し、取り散らしたものなど整へ、座敷を箒き清めて經を誦してゐた。

其の中に七兵衛が來た。

日は全く暮れた。

源敎は七兵衛を佛檀の下に隱して節穴から亡靈を覗かせることにした。

其の夜は燈明も庵の灯もわざと幽かにして佛檀の前に新薦(あたらこも)を敷き、亡靈の坐る塲所を拵へ、入口の戸を細目にあけて二挺の剃刀を用意した。

宵から變つた空模樣は風を加へて吹雪になつた。隙間洩る風が骨に沁みて寒く痛かつた。明滅する燈明の光に微かに認められる彌陀の尊像は、吹きこむ風に時々ぱつと燃え立つ圍爐裡の火に赤黑く照し出されて、其の度毎に破れ障子が淋しく泣いた。

七兵衛は布團にくるまつて佛檀の下に寢た。

爐端に暖をとりながら七兵衛と話してゐた源敎は、連續する欠伸に念佛を嚙みまぜて亡靈の來るのを待つてゐた。

夜は次第に更けた。

烈しくなつた吹雪がさらさらと雨戸を打つた。外は魔の走るやうに風が吹き騷いでゐた。

源敎は躰軀が温るにしたがつて次第に睡氣を催してきた。始めの中はぢつと我慢し

てゐたが、遂には骨身がふやけるやうに弛んで耐えられなくなると、とろ〳〵と吸ひこまれるやうに眼を閉ぢて、こくり〳〵と居眠りを始めた。

可なりの時間が經過した。

源敎は大きく居眠りして危く倒れようとしてはつと眼をあけると新薦の上にはいつの間にやらお菊の亡靈が來てゐて、佛檀に向ひ首垂れてゐた。待ち設けたる事ながら源敎はぞつとしてはつきり眼がさめた。彼は七兵衛に合圖して立ち上り、衣の袖に襷を綾取り、用意の盥に水を汲み、剃刀取つて亡靈の後に廻つた。

すき透るやうに白い頂から頰にかけて亂れかゝつてゐる黑髮は雫が垂れるばかりに濡れてゐた。

「よし〳〵。此の髮の幾筋を殘して後日のしるしにしてやらう」と、源敎が剃り始めると、剃られた髮の毛は皆吸はれるやうに亡靈の懷に這入つた。

「矢張り女だ。こんなになつても未だ髮の毛が惜しいと見える」

さう思つた源敎は今度は髮の毛を指先に絡めて剃り落すと、それでも矢張り毛は自

然と絡めた指をぬけて亡靈の懷に這入つてしまつて、剃り終つた時には僅かばかりの毛しか源敎の手に殘つてゐなかつた。

七兵衛が佛檀の下から震ひながら眞靑になつて這ひ出して來た。もう其の時は亡靈は其處にはなかつた。

「御坊はまあよく剃刀を當てられましたなあ。隱れて見てゐてさへ餘りの怖しさに私は齒がが〳〵鳴りました。こんな恐しいものを見たのは今が始めです。もうとても一人で歸る元氣もありませんから、今夜は此處に泊めて貰ひます」と、云ふ。

「これ御覽なさい。後の証據にと思つて漸くこれだけ髮の毛を殘しました。……恐しかつたでせう。今夜は此處にお泊りなさい。二人でゆつくり爐端で語り明しませうそして明日からはお菊が亡靈を見屆けたことを村人に吹聽して下さい。衲もそなたを証人にお菊が亡靈を語り傳へて敎化の便りに致します」と、それから色々と佛法の功力の廣大なことなど語り合ひ酒など呑んで體を温めてゐるうちに夜があけた。

四

吹雪は歇んでゐたが、灰色の空は落莫たる沈鬱の色が凝り、一面に平らになつた朝明の雪の原は堅く凍つてゐた。

七兵衛は源敎を伴うて朝のうちに己が家に歸つた。

村人は聞き傳へて續々七兵衛を訪れた。

源敎は證據の髮の毛を取り出して、一部始終を村人に語つた。一同はいたく感動して、しめやかに相和して稱名念佛した。

七兵衛は亡靈のために百萬遍を唱へることを提起した。一同は我も〳〵と其の善行の仲間に加はることを申し出た。七兵衛の妻は夫にすゝめて餅を搗かせ、草庵に持ちこむことにした。

話は忽ち擴がつて隣村にまで傳つた。善男善女はよなべを休み口々に念佛を唱ひながら、續々と源敎が草庵に集つて來た。其のため豫期以上の多人數で、源敎を導師と

して、お菊のために盛んな百萬遍を營んだ。

人々は七兵衛夫婦の志の餅を食べて夫々家に歸つた。

此の事があつてから人々の憐憫の情は翕然としてお菊に集つた。そして誰云ふとなく、「お菊の髮の毛を埋め、石塔を建てゝ供養したら佛が定めて喜ぶであらう」と、云ひ出した。すると其の事が忽ち成立して、同志の人々は着々準備にとりかゝつた。

そこで源敎は其の頃智識の聞え高き最上山圓興寺の上人に願つてお菊が戒名を貰ひ彼の女が溺死した橋の傍に剃り殘した髮の毛を埋めて石塔を建て、すべて天命を終へた人を葬ると同じく懇ろに其の後を弔つたのである。

紺屋七兵衛は間もなく一念發起して源敎が弟子になつた。

關山村の毛塚といつて今に殘るは即ち其の時お菊の髮の毛を埋めた塚である。

三　正　の　蛇

毎年、盆になると、上州から越後へ絹織物を背負うて商ひに來る、吉次、吉内、吉三郎といふ三人の兄弟があつた。

或る年、ひどい縣雨のために信濃川の堤防が破壞して、長岡附近は一面泥の海になつたことがあつた。

其の時、三人兄弟は永年定宿にしてゐる古志郡富曾龜村の庄九郎の家に逗留して雨の歇むのを待つてゐた。しかし、雨は歇むどころか益豪雨になつて、いつ霽れるとも分らなかつた。

其の時はもう三人兄弟はすつかり商ひを了つた後だつたので、其の方の心配はなかつたが、澤山の賣上金を持つたまゝ雨に降りこめられていつまでも國へ歸ることが出

來ないので、毎日額を鳩めて「困つた、困つた」と、愚痴をこぼしてゐた。

雨は毎日、日を暗うして降つてゐた。家々は大方床の上まで浸水してゐた。低地の家屋は流れ出すものさへあつた。

「毎日、かう降られては堪りませんな」と、或日庄九郎が三人兄弟の部屋に這入つて來た。

そして四方八方の話の末に。

「お前さん方も商ひを濟した後のむだ泊りぢやつまらない。居喰ひをしたら山も竭きる譬、どうてす、此の通りの泥の海だが一つ乘り出して見る氣はありませんかね。生れ落ちるから水の上で育つたからだだ。滅多に土左衛門にするやうなことはありませんやね。一日も早く國にかへつて、仕入をして商ひする方がお前さん方もどの位得だか分りやしない。お前さん方さへ其の氣なら泥の海てちと骨は折れるが渡してやりませうか」と、俠氣な深切を見せながら話した。

三人兄弟は互に顔を見合せた。多少の危險は思はぬてもなかつたが、何しろ待ちあぐんで居た矢先の事だつたので、何れも渡りに舟と喜んで、早速泥の海を渡してもらうことに一致した。

庄九郎は早速舟の用意をした。

兄弟は支度もそこそこ舟に乘つて沖に出た。

舟が恰度甚兵衛新田の土手が崩れて大きな濠になつた俗稱「久右衛門ぢッ濠」のあたりまて來た時、庄九郎の眼の色が急にかはつた。

兄弟はこれに氣がつかなかつた。

庄九郎は突然隱してゐた鋭利な大鎌で、舷に凭つて水面を見てゐた吉次の首を水もたまらず、水中に掻き落した。驚いて飛び上つた吉内の脇腹をかへす鎌で眞一文字に横に割き、逃げようとする吉三郎の首を後ろから水中に掻き落した。

血振ひした庄九郎は素早く三人の胴卷から莫大の賣上金を奪へとり、三つの死骸は鎌と共に重石をつけて濠の底へ沈めてしまつた。

庄九郎は何喰はぬ顔して歸つて來た。

程經て庄九郎は俄大盡になり澄した。

近隣のものは皆不審がつた。

其の頃から庄九郎の家の爐の自在鍵を三疋の小蛇が纏はつて上つたり下つたりするやうになつた。一疋は白く、一疋は黑く、一疋は紅であつた。それが不思議にも庄九郎の宅に客さへあれば屹度、恰も人目にかゝりたがるやうに出て來ては、庄九郎が客と對座してゐる居爐裡の自在鍵を上つたり下つたりするのであつた。

「あれは何かの祟りに違ひない」

「庄九郎は人の恨を受けてゐる」

「俄か大盡になつたのも或は人を殺して金でも奪つたのではないか」などゝ世間に噂されるやうになつた。

庄九郎は日々夜々良心の呵責に堪へ兼ねて段々衰弱した。

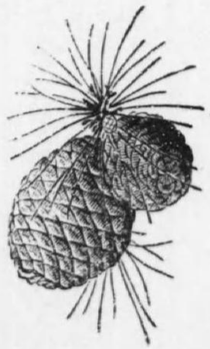
人々は懷疑の眼を以て庄九郎を注視した。

たまり兼ねた庄九郎は「久右衛門おッ濠」の土手に二十三夜塔を建てゝ、心ひそかに三人兄弟の跡を懇ろに弔つた。

それから後、蛇は人目に懸らなくなつた。

庄九郎はどういふ往生を遂げたか、何時頃の人であつたか傳はつてゐない。しかしそれから庄九郎の家では屋根を新しくする毎にいつでも半分づゝ葺きかへて、殘餘の半分は三疋の蛇の栖處として殘したさうである。

三枚の鱗



五十嵐川の上流、笠堀といふ處の舊家に熊倉治右衛門といふ人がありました。律儀一遍の温順しい人でありましたが、不幸にして若い時に最愛の妻を失ひました。治右衛門は亡き妻の遺れ記念の一人娘が可愛いので、それ切り後添も娶らず、只、其の成人するのを樂しみ待つてゐました。

しかし、主婦のない家庭は次第に淋しく、治右衛門も段々元氣が衰へて、一家は日一日と寂しくなり、今迄はゆつたりとした長閑な春風の吹いてゐた家が急に淋しく、木の葉の散る秋のやうになりました。

數多の奉公人は早くも傾く主家の前途に見切りをつけ、相前後して何れも暇取り、果ては訪ふ人も間遠になつて、自然と家運が衰へて行きました。

治右衛門が氣がついて頽勢を挽回しようと發憤した時はもう既に晩く、彼が所有の廣大な土地は、打ち續いた水や雨や風の不慮の天災のために悉く荒れてゐました。

治右衛門は茫然として暫く途方に暮れましたが、漸く氣を取り直し、躍起となつて家産の恢復にあせり始めました。しかし、生來利殖の道に暗い彼があせればあせる程すべて事、志と齟齬し、益々悲境に陷つて、可惜由緒ある什物まで瞬く中に皆人手に渡し盡してしまひました。

尾羽打ち枯した治右衛門は潔く觀念して、家屋敷を賣り拂ひ、世を捨てゝ、娘と共に光明山の麓に身を忍ばせました。

娘は成長するに隨ひ段々美しくなつて行きました。落魄の身は漸く手織の布子で肌を包むに過ぎませんでしたけれども、天の成せる麗質は自ら妙なる色香を含んで、鄙に珍らしいあでやかな、氣品の高い姿でありました。

貧しい中にも治右衛門は其の未だ春知らぬ清い姿に見惚れては、毎日ほく〳〵喜んでゐましたが、將來に希望のない親子、可惜齡を月花に背けて徒らに此の山里に朽ち

果てさせるかと思ふと、また堪らず哀しくなつて、人知れず老の泪に咽ぶことも度々ありました。

娘は十六の春を迎へました。

光明山は薄紫に霞んで、麗かな春の光は麓の野を見舞ひました。和かな春風が萬物を育むやうに吹き渡ると花は到る處にあでやかに笑ひ、蝶は戯れて舞ひました。

娘は身も心も輕くなつて、あどけなくも愛の唄を口吟むやうになりました。

或る日の夕方でありました。

娘は緣先に立つて夢のやうな心で、遠く何物かを憧れ望んでゐました。すると玄關に訪ふ男の聲がしました。はつと我にかへつた娘は思はず顏を赤らめ胸を躍らせて、玄關の障子を細目にあけました。

そこには人品骨柄卑しからぬ一人の武士が、凛として立つてゐました。娘は其の端麗な姿にはつと度を失ひ、顏を火のやうに染めて俯向きました。

「行き暮れて難澁致す、一夜の宿を貸して給はらずや」と、武士は慇懃に取次を乞う

たのであります。

娘はあたふたと奥に駈けこみました。

驚て武士は旅の草鞋を其の玄關に解きました。

あくる朝でありました。武士は名殘惜し氣に見送る親子に別れを告げて、何處とも

なく立ち去りました。

娘の心のカメラには武士の面影が既に此の時はつきりと收められてゐました。

娘は仕事も手につかず、上の空で其の一日を暮しました。

日暮方でありました。

ゆくりなくも其の武士がまた訪ねて來ました。

初戀の炎に燃えた娘はいそ〳〵と恥しさうに出迎へて、草鞋の紐を解き、足を洗つ

てやりました。

翌日からその武士は毎日未明に家を出ては夜來て泊りました。

娘はいつの間にやら身も心もその武士に許してありました。

併し、不思議なことには、娘がいかに其の素性を尋ねても、武士は只「其の中に分

るであらう」と、微笑むばかりなので、娘は嬉しい中の不安として絶えず其の事を氣

にしてゐました。

其の中に樂しい春も暮れ、暑い夏も過ぎて、哀れ身に沁む秋となりました。娘は武

士の胤を宿して既に隠し切れぬ身になつてゐました。

「困つた事になつてしまつた」と、後悔しても後の祭。子に目のない父親は、ともす

れば激し高ぶる娘の感情を和らげ、只ならぬ身を何くれとなく勞り慰めてゐました。

或る日のことでありました。

娘は未明に家を出る武士の着物の裾に苧をつけた針を二針三針縫ひつけて、知らず

に曳き行く後をつけて行きました。苧は野越え山越え溪を渉つて、數里の奥の人里離

れた澗間に彼の女を導きました。

疲れ果てた娘は綿の如く、さながら太古のやうに亂れ茂つてゐる藪の中に大蛇のやうに蟠つてゐる木の根に腰を下して、ぐたりと頂低れてゐると、人のやうな話聲が聞えるのです。此の山奥に不思議な聲がすると思つて耳を欹てると、恰度親がその子を戒めてゐるやうな調子で

「……だから前から敎へて置いたではないか。人間といふものは萬物の靈長で、殊に五月節句に菖蒲湯に這入るから、どんな毒でも消してしまつて、他からの毒は受けないものである。それにひき換へ我等のからだには鐵の針一本觸れても命が終つてしまふ。しかるに其の靈妙なる人間に交はるからこそ這麼禍に罹つたのだ……悲しやお前の命はとても助かる見込はない……」と、いふのです。

娘が聲をたよりに忍び足して窺ふと、藪の底に一つの洞穴がありました。其の穴の奥に闇にもしるき懷しの武士が大病になつて呻いてゐるのです。

娘はかけ寄つてあたり憚らず介抱しようとすると、武士は苦しい息の下から之を制し

「まこと我が身は蛇身である。圖らずそなたと契つたが、今朝裾を縫はれた針の毒で命既に旦夕にせまつてゐる。そなたの腹の子は正しく我が胤なれば、形見と思うて大切に育てられよ。草葉の蔭で母子の行末を守るであらう」と、云ふのです。

これを聞いた娘は一時に鬼胎と慄きとに襲はれて、足の竦むのを覺えました。それと同時に鬼畜に犯された身が汚らはしくも切り割き捨てたいやうでありました。娘はよろめく足をふみしめて一目散にもと來た道を夢中で逃げ歸りました。

其の後、月滿ちて娘は玉のやうな男の子を產みましたが、その子は腋の下に三枚の鱗があつたといふことであります。

後年、五十嵐小文治と名乘つて、勇力無雙、適れな豪傑となつて偉名を天下に轟かせたのは其の子であります。

五十嵐小文治は壯年の頃、阿倍貞任の遺臣黑鳥兵衛といふ怪賊が妖術を以て越後一圓を荒した時、これを征伐して勇名を馳せ、晩年には、源氏の加勢に馳せ參ずる那須與市に誘はれたので、年老いて其の任にあらずと辭退したけれども、其の時、力試し

に投げた大石が小一里もさきの五十嵐神社の大杉の間に挾まれて取れなかつたのが其の儘今に殘つて、幹の中程でそのかみの怪力を語つてゐるさうであります。

貂

石

蒲原郡の或る寺に不思議な一室があつた。

そこに泊つた人々の話によると、或る人は夜中に自分の身體諸共に釣り上げられて天井に押しつけられた。

或る人は突然天井から出た大きな手で、寢てゐる布團の上から抑へつけられて氣絶した。

或る人は緣側の障子を破つて突き出た手が、見る間に一間も延びたのに膽を冷して悲鳴をあげた。

其の他さまざまである。

これ等の噂の眞最中、本山の使僧が此の寺に來て泊ることになつた。

夕餉が濟んだ時、住持は使僧に向つてから云つた。

「此の寺には昔から怪しいことがあります。それは貂の年老いたのが惡戯をするのださうであります。それも餘所から來て泊られる方にのみするので、私共は噂を聞くばかりで一向其の實際を見たことがありません。若し御寢所に怪しいことがありましても、其の時は見て見ぬふりしてゐて下さい。觸つたり、騷いだりすると圖に乘つて、隨分ひどい惡戯をするさうですから……」と、

使僧は大力で可なり腕に覺えがあつた。

其の話をきいた時。

「これは面白い」と、二つ返事で特に其の不思議な一室に寢ることにした。

夜が更けた。

使僧は寢酒を貰つて一人ちびり〳〵やりながら、床の上に安坐を組んで、どんな惡戯をするかと待つてゐた。

九つの鐘が鳴つた。

あたりは皆寢鎭つてゐた。

部屋の障子がすうとあいた。晝のうち見かけぬ小僧が這入つて來た。

「こいつだな」と、思つた使僧は素知らぬ顏して聲をかけた。

「おう小僧、よいところへ來てくれた。一人で淋しがつてゐたところだ。一つ酒の酌でもしてくれ」

小僧はにこ〳〵して

「お酌させて戴いて、お話を伺ひたうムいます」と、傍へ來て坐つた。

「うまく化けたな」と、思ふと使僧は可笑しかつた。

色々の話をした。別に變つたこともない。

丑三つが過ぎた。

「どうかして化の皮を剝いてやらう」と、思つてゐると、

「もうお話も大抵伺ひましたから、退屈凌ぎに庭へ出て相撲でも取らうぢやありませんか」と、小僧が云つた。

「そら來た」と、思つた使僧は

「よし眠氣ざましに一番やらう」と、双方身仕度して庭へ出た。

隙を覗つてゐた使僧は「やつ」と、掛聲諸共に小僧の兩足を攫んだ。不意を食つた小僧は身を藻掻いてしがみついて來た。それを搖り取つた使僧は眼よりも高く差し上げて、力任せに大地へ叩きつけた。

「きやつ」と、魂消る聲がした。

と、小僧の姿はどこかへ失せて、其處に奇麗な石が出來た。

翌朝、使僧は其の寺を出立した。

それから寺に貂の惡戯が無くなつた。其の石は今に「貂石」と云つて其の寺に殘つてゐるさうである。

大正十三年九月廿八日印刷
大正十三年十月五日發行

越佐傳說　夢を買ふ話

不許複製

定價金壹圓貳拾錢

著者　石原亭　長岡市東千手町
發行者　加藤久次郎　長岡市觀光院町
發行所　加藤書房　長岡市觀光院町　振替・長野一四二七
印刷所　北越新報社

288
337

終